九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州文化史研究施設開設記念図録

荒木, 見悟

井田, 好治

井上, 忠

岡崎, 敬

他

https://doi.org/10.15017/1474900

出版情報：展観資料, 1966-05-11. 九州大学文学部附属九州文化史研究施設
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州文化史研究施設

開設記念図録

九州大学　文学部

1966年5月

壺

水鳥形瑞

都府樓図巻

蒙古襲来画巻物

はじめに

九州の地は日本の最西端に位し，海を隔てて半島および大陸に接している関係から，古代より相互の間に交通が行われた結果，彼地の先進文化を摂取する機会に最も恵まれていた。古代においては畿内と並ぶ一大文化圏を形成したが，やがて中央国家の成立とともに，以後は専らその政治権力の強化に伴う外来文化の摂取の窓口としてその後の日本文化の形成に大きな役割を演じてきた。

このような重要性に鑑み，わが九州大学においては以前より九州文化史研究所を中心として歴史，経済，社会其他の各分野に亘りその特異性について研究を進めてきたが，昨年文学部の研究施設として正式に認可されたのを機会に，更に多角的に綜合研究を行うべく努力している。本パンフレットはその開設を記念して本学の所蔵に係る関係資料の中より貴重なもの若干を選び出して編集したものである。これによってその一班を察知していただければ幸である。

1966年5月

九州大学九州文化史研究施設長

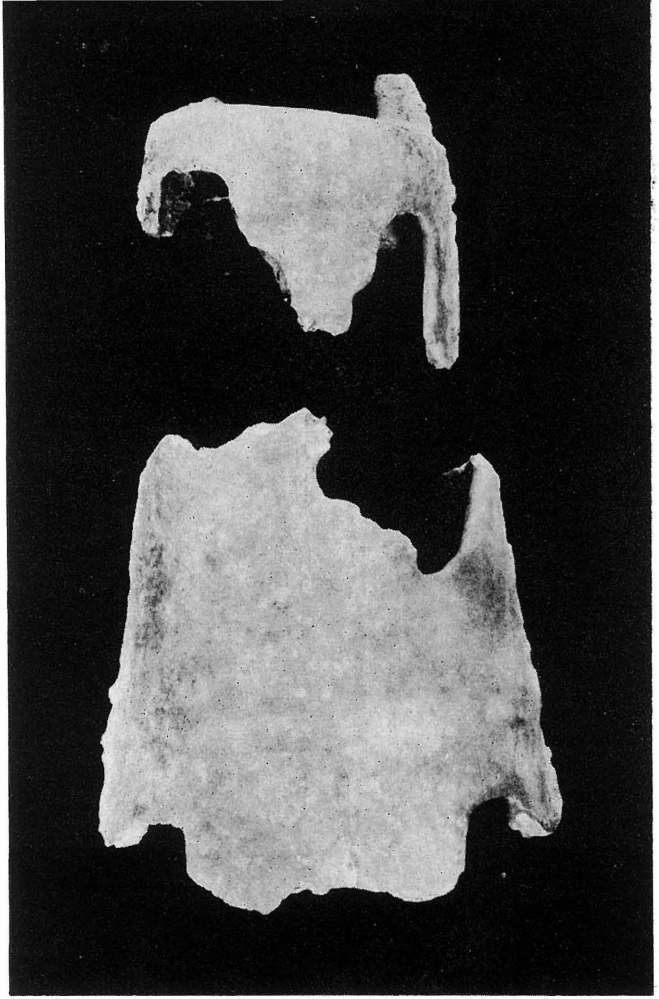
箭内健次

1　小　形　壺

高　さ　12.3 cm
口　径　7.7 cm
出土地・長崎県南高来郡
北有馬村原山

縄文晩期。昭和35年日本考古学協会西北九州綜合調査特別委員会が行った調査の際，島原半島の原山支石墓遺跡の第2号支石墓の下の合口甕棺に副葬されて出土した2個の小形壺の一つで，黄褐色で胎土は良いが焼成はあまり良くはない。

直立した口縁で，肩部は，やや盛り上がり気味に反転している。胴部はあまり張らず，丸底に近い平底である。この壺にともなう甕棺は口縁が内へ屈折する特徴をもち，口縁と屈折部に刻目凸帯があるいわゆる夜臼系甕棺で，器壁に条痕をもっている。この壺は口縁が肥厚しなく，又，開かず，肩が張り，丸底に近い平底をもつなど縄文土器の特徴をそなえているが，弥生壺とも一脈通じるものがあり，弥生式土器への胎動がうかがえる。（考古学研究室蔵）

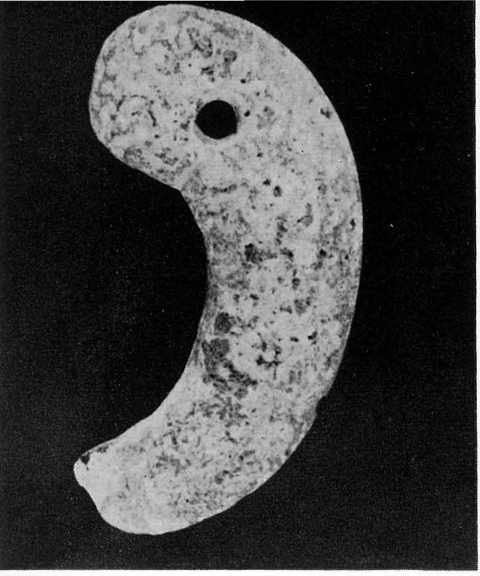


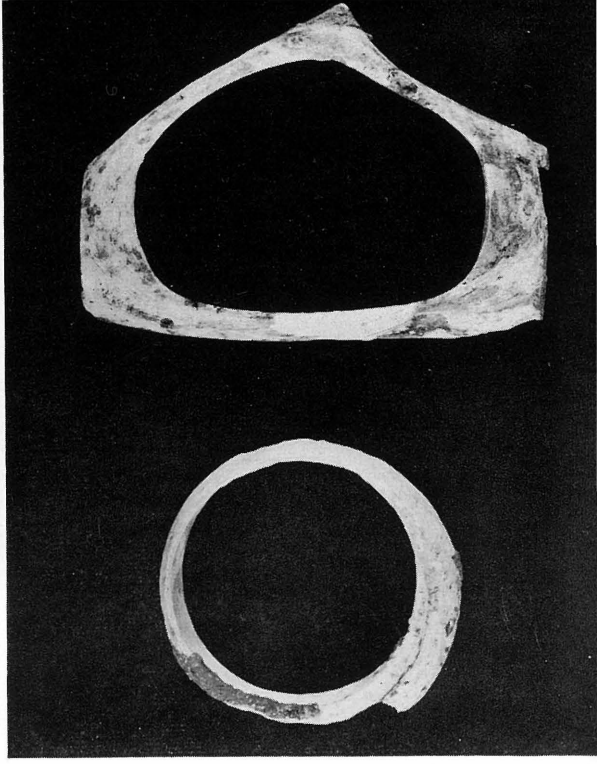
2　銅　鐸

高　さ 10.1 cm
下底長径 5.8 cm
出 土 地・福岡県筑紫郡春日町大字小倉字大南

弥生後期。水田より比高10mの小丘斜面の現地表下30cmの土中より発現されたものであるが，これは弥生後期の土器・石器・鉄器等と共に住居を囲むV字型周濠内に流れこんだものである。

白緑色で銅質はきわめてもろい。一部欠損部はあるが略完形をなす。鐸身上面部に鈕をはさんで，整内の二孔の型持の孔を有し，裾にも両面に各々二ケの切れ込みを持つ。鐸面上部に不整の窓が各々両面に二ケづつあり，ここから折損している。鐸面には二条一組，乃至一条の突線がキ印に陽出されて六区劃をなす。袈裟襷文銅鐸の流れを汲んでいると思われる。畿内のそれに比べ小形であるが，明らかに我国通例の銅鐸に通ずるものをもっている。九州で発見された唯一の銅鐸で，非常に珍らしいものである。（考古学研究室蔵）





3 ガラス勾玉　長さ　5.3 cm

出土地・福岡県筑紫郡春日町大字須玖字岡本

弥生時代。明治32年(1899)合口甕棺から，30余面の前漢鏡銅剣銅矛，玻璃璧等を，同時に棺外から銅剣類が発見された。このガラス勾玉はのちに鹿角製管玉と共に採集されたものであるが，前遺物の一部と考えられる。

弥生時代の勾玉としては大型で，頭端に刻線を持つT字頭勾玉である。T字頭の勾玉の刻線は普通3～4条を持つが，この勾玉では二条は明らかに認められる。全体はe字形をなし，横断面は円形をなす。

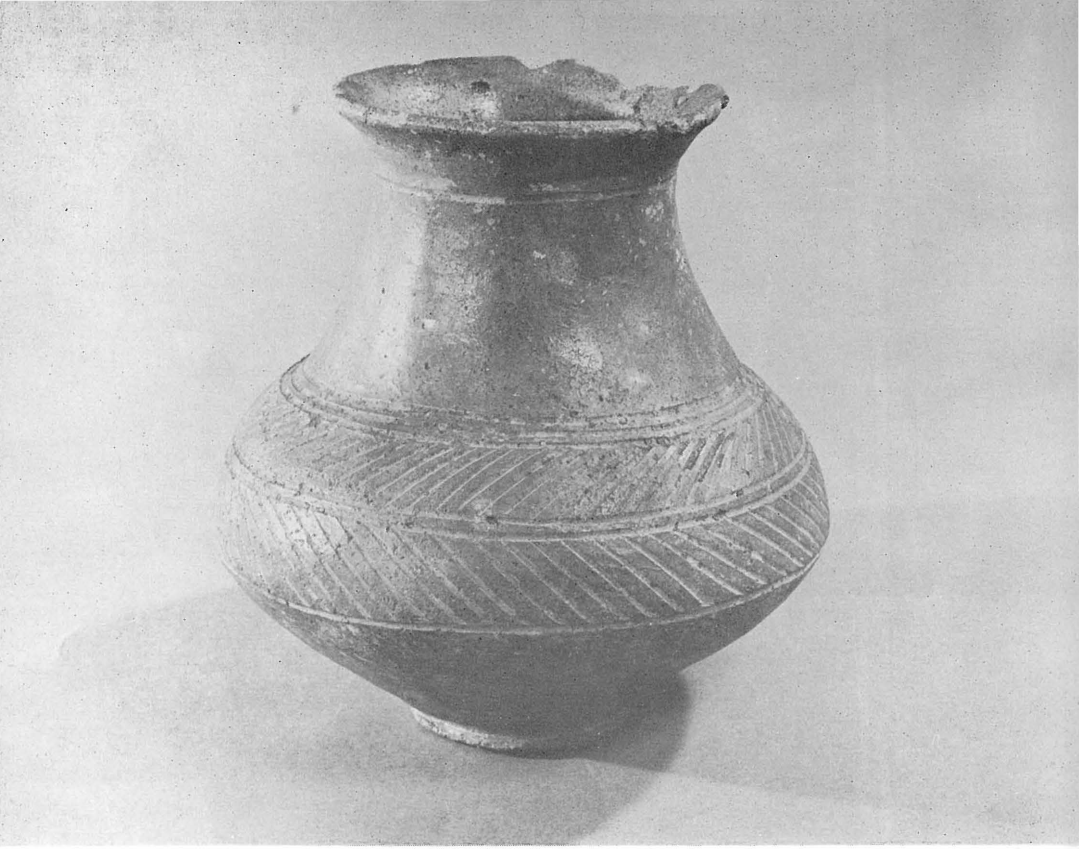
材質はガラスであるが風化されて，白緑色を呈している。この時期のガラス製品として他に璧，釧，管玉，小玉等あるが，ガラス製勾玉は他に類例がなく，古くから知られていた。なおこの須玖の近くの福岡市日佐弥永原遺跡から，ガラス勾玉の鋳型が発見されており，我が国におけるガラス製造についての興味ある問題を提起している。（考古学研究室蔵）

4　貝　輪　㊤外径 横10.3cm 縦 7.4cm　㊦外径 6.3cm 厚さ 1.8cm

出土地・福岡県飯塚市立岩

弥生中期。両方とも昭和8年12月飯塚市の運動場開設の際出土した，いくつかの弥生中期の甕棺内より発見されたものである。先づ下の貝輪はイモガイという巻貝の横切りによってできる円形のもので，第3号甕棺からは女性人骨と共に28個の貝輪が発見され，第4号甕棺からは女性人骨と共に左右前膊のものを合わせて27個の貝輪が発見されている。

この貝輪の材料となるイモガイは九州以南の南島でしかこの大きさのものはとれず，南島との交易がうかがわれる。この貝輪は現在は風化しているが，元来は美しい斑紋をもつもので，当時の美しさが想像される。上の貝輪はテングニシという巻貝の縦切りによって作られたもので，上側の突起はその貝の結節を利用したもので，第5号甕棺からは男性人骨と共に左右前膊合わせて12個の貝輪が出土している。このようなことから女性は横切りの貝輪を，男性は縦切りの貝輪をはめていたことがうかがわれる。（考古学研究室蔵）

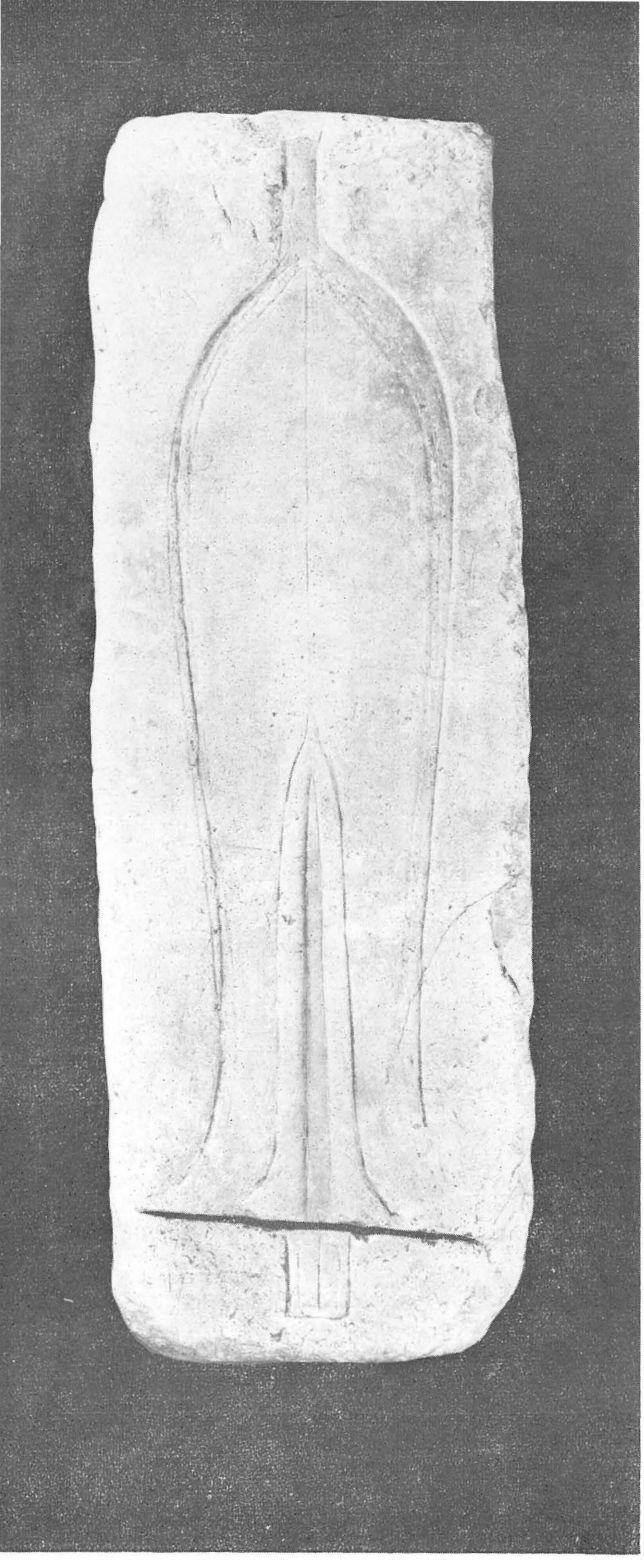


5　壺　高 19.3cm　胴 最大径 19cm　口径 11.9cm
出土地・福岡県福岡市西新町藤崎

弥生前期。甕棺及び箱式棺を主体とする墳墓中，甕棺墓群の墓域からの出土で，副葬品と考えられる。

うすい褐色で，表面は研磨されており，胎土に砂粒を含む。口縁と頸部の境に篦による沈線一条と，肩部に，同じく篦による有軸羽状文が描かれている。頸部がやや長くのび，胴部は扁球形をなし，底部は円盤貼付によるものであるがやや低い。

有軸羽状文や，円盤貼付等，この時期の特徴をよく示しているが，全体的にみると，この時期の定式化したものとは，少し崩れており，異った感じを抱かせる点が注目される。（考古学研究室蔵）



6　銅戈鎔笵

長さ 51.5cm
巾　 18cm

出土地・福岡県糸島郡
前原町三雲

弥生後期。材質は灰色の砂岩，平滑な平面に，広形銅戈の雌形がほられている。鋒の先端に湯口が設けられており，二雙の雌形を合わせ，木枠等を背にあて縄などで緊縛し，この湯口から鎔融した青銅を流し込んだものである。

広形銅戈の中でも，これまでの出土例の中で，いちぢるしく巾広く大きい。他に，類例として福岡県香椎出土の鎔笵などがみられるが，その鋳製品は発見されていない。福岡県の北半分にその分布がみられる。

この形式の銅戈はすでに利器としての用を完全に失っており，非実用の極端に達したもので，鈍重な感じが強い。

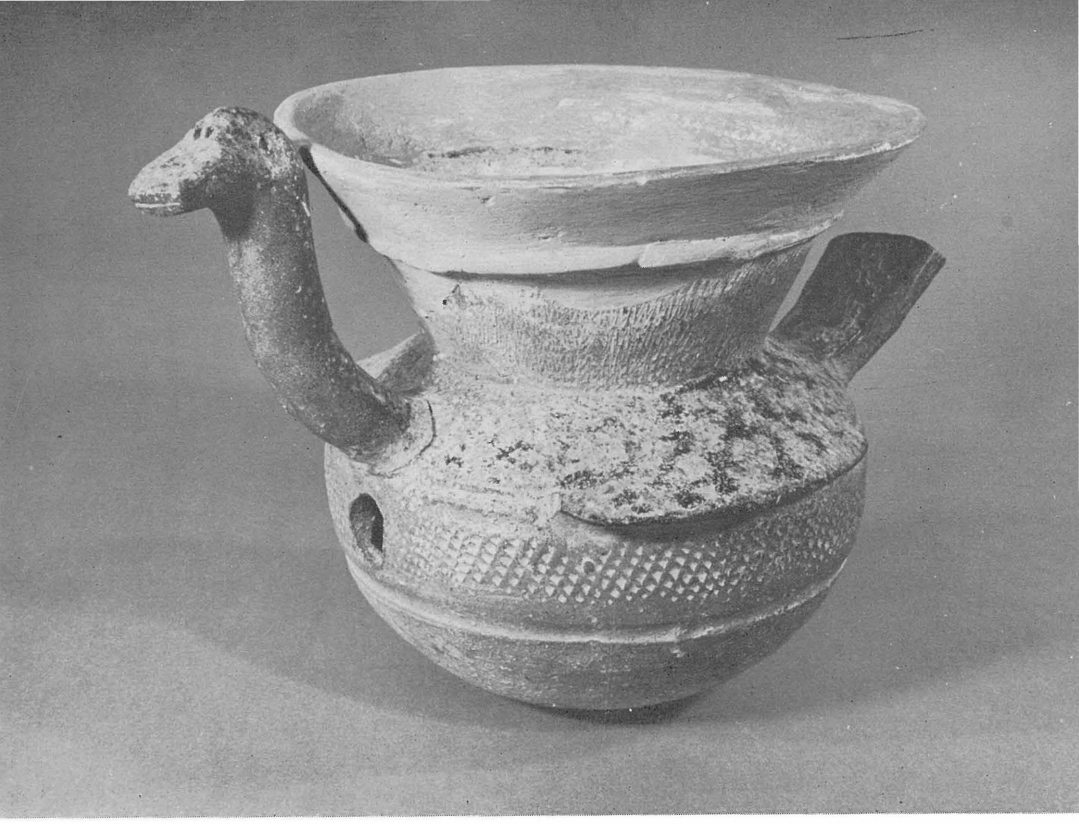
時期は青銅利器もその終末期に対応するものと考えられる。弥生後期のものであろう。（考古学研究室蔵）

7　盤　龍　鏡

面　径　12.4 cm
出土地・福岡県嘉穂郡穂波町枝国山ノ神古墳

古墳前期。六世紀前半頃の古墳で，横穴式石室から甲冑，武器類と一緒に発見された。表面漆黒色を呈する白銅質で，外帯には唐草文，内区には二頭の龍が半肉彫にあらわされているが，龍の胴部は鈕の下にかくれて頭と尾が前後にあらわれている。外帯と内区の間に「王氏作」の銘がある。盤龍鏡の年代は，紀年鏡をみないが，後漢から三国にわたって行なわれたものであり，山ノ神古墳出土のものは後漢末をさして下らない時代のものであろう。舶載品であることはいうまでもない。わが国では盤龍鏡は前期古墳から三角縁神獣鏡と伴出することが多い。

山ノ神古墳からはこの外に半円方形帯神獣鏡が一面共伴している。（考古学研究室蔵）



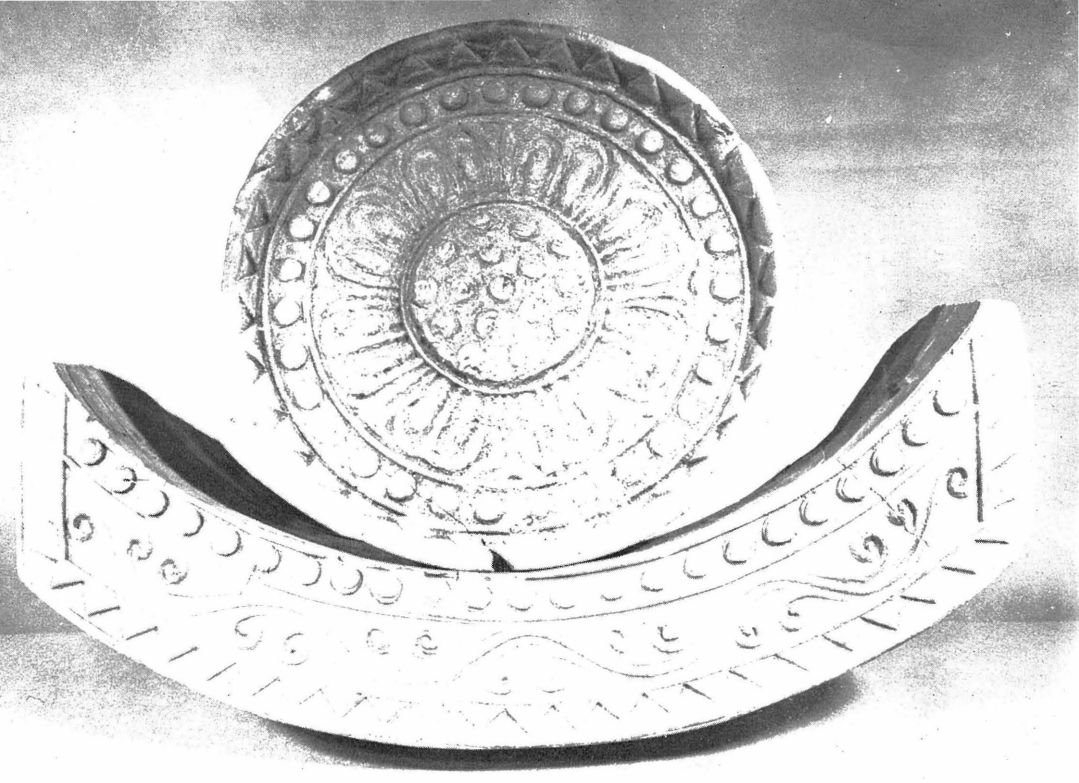
8　水鳥形瑞

高さ 11 cm　口径 12 cm
出土地・福岡県京都郡苅田町　番塚古墳

古墳時代後期以後に日本で製作されはじめた須恵器は，これまでの弥生式土器，土師器とは系統を別にするもので，外来の技術によって生産されたものである。成形には轆轤を用い，登窯によって1000℃以上の還元状態で灰色ないし灰黒色に焼き上げられている。

形には壷，甕，盌，蓋杯，高坏，器台があるが，瑞は胴部に小さい円孔をうがった壷である。番塚古墳出土のものは水鳥をかたどった装飾がほどこしてあり，瑞としてはめずらしいものである。表面には一部に窯内で灰をかぶってできた自然釉がかかっている。

番塚古墳からはこの瑞のほかに器台，高坏，壷，蓋坏などが出土している。（考古学研究室蔵）



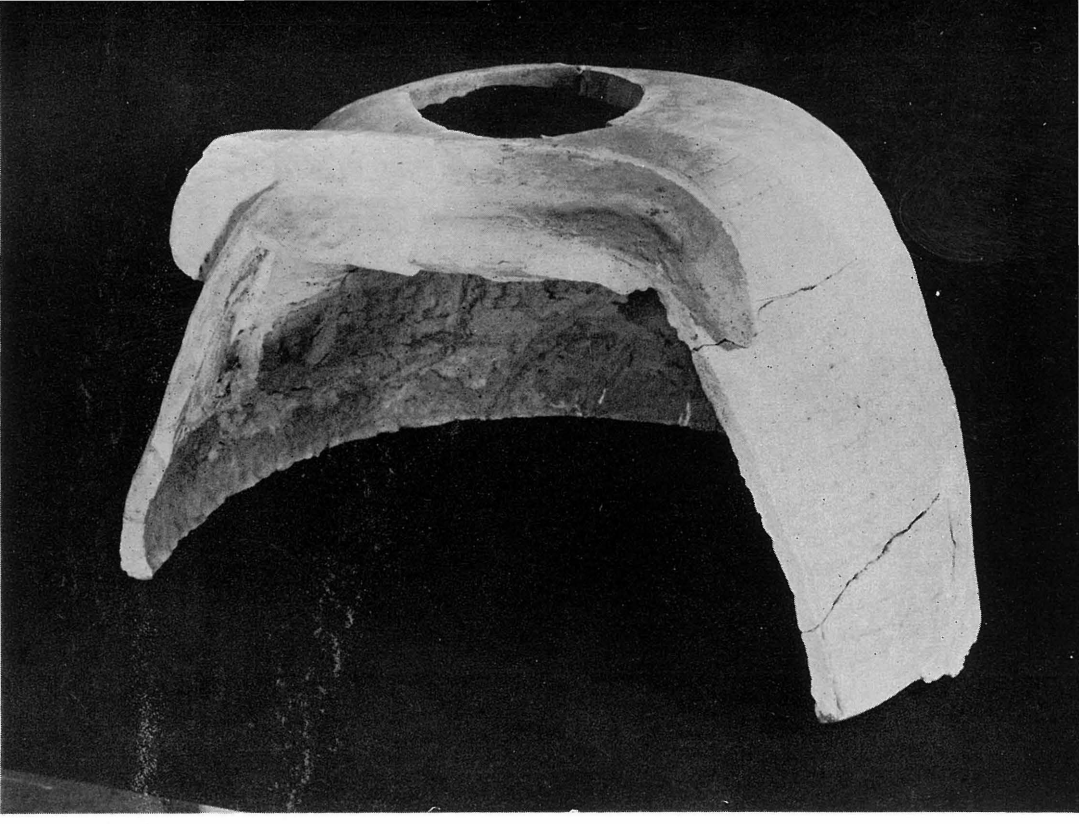
9　軒丸瓦・軒平瓦

㊤ 瓦当面 径　17.5cm
㊦ 瓦当面全長 30.5cm
幅　5.1cm
出土地・福岡市内老司
老司瓦窯址

大宰府を中心とした九州各地への歴史文化の波及は，大宰府系古瓦の分布により最も端的に認めることができる。その大宰府系古瓦は大きく鴻臚館式と老司式とに分類され，この瓦は老司式に属するものである。またこの老司式古瓦は，畿内の藤原宮址，本薬師寺出土古瓦の様式を踏襲したものであるが，畿内の古瓦が波線鋸歯文を使用するのに対し，老司式古瓦の特色とするところは，周縁に陽起鋸歯文を配していることである。この老司式古瓦は，白鳳～奈良前期に製作されたもので，九州において最も均整のとれた優秀な作品である。

軒丸瓦は，複弁八葉，中房内の蓮子は中心より1-5-10の順に配され，周縁にも珠文32個が配されている。

軒平瓦は，中央に扁行唐草文，上縁に珠文，下縁及び両側に陽起鋸歯文を配している。
（考古学研究室蔵）



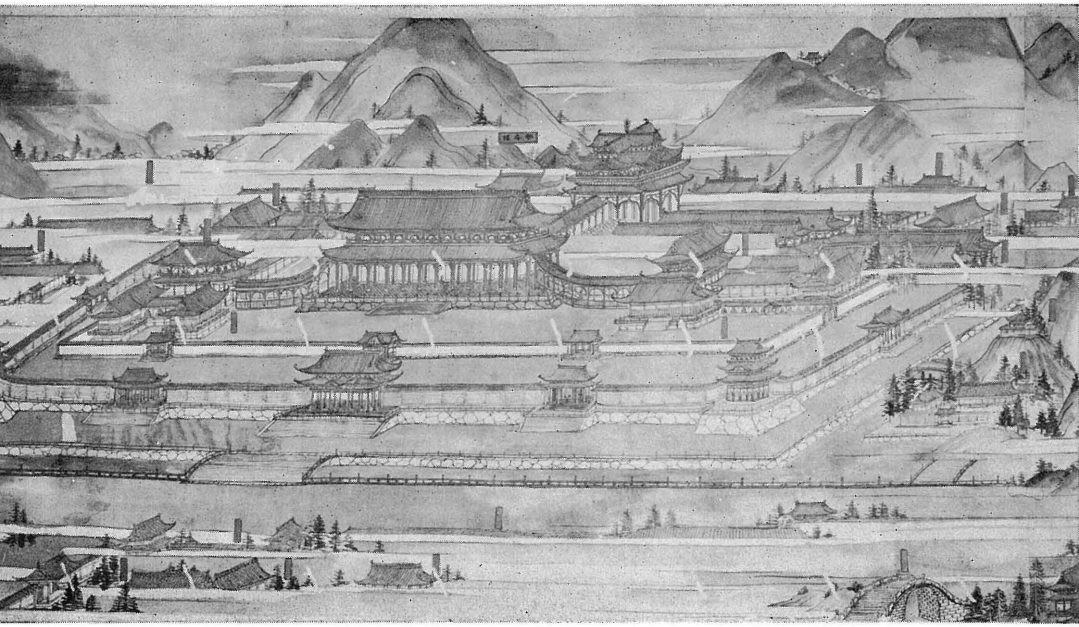
10　土師製竈

高　さ　36.9cm
底部幅　63.5cm×47.2cm
出土地・福岡県山門郡瀬高町字鉾田

奈良時代。竈は羽釜・甑・甕・鍋等と用途に応じ組合すことにより炊事具としての機能を果す。

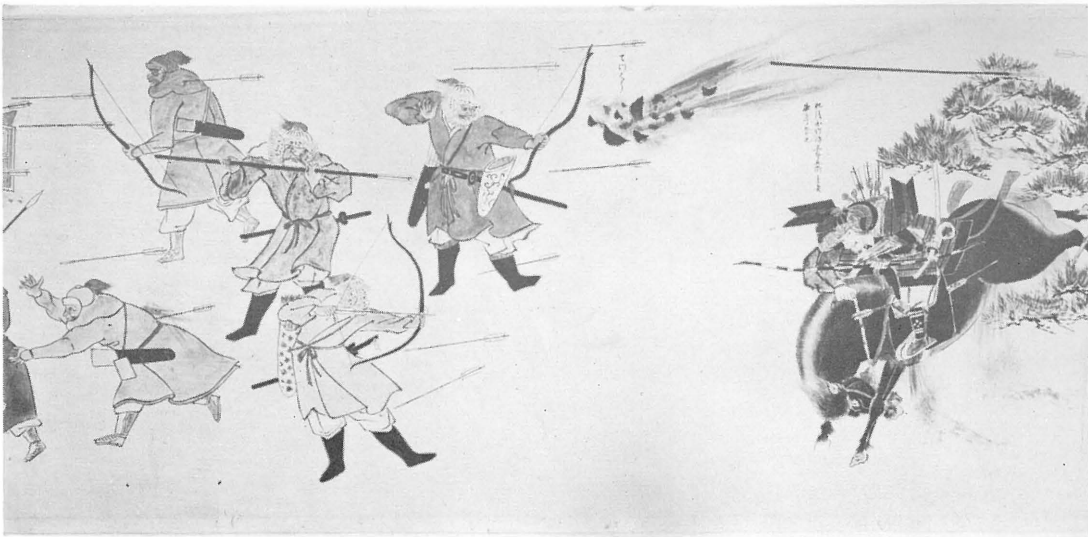
この遺跡は奈良時代の集落址で，他の遺物とともに竈・甑・甕の三点が一組として発見された。この種の竈は，東日本における竪穴住居内のつくりつけの竈に対し，西日本に多く出土し特色とされている。近時多くの発掘により資料も増加してきており，特に奈良県船橋遺跡，大阪府難波宮遺跡，山口県周防国府遺跡等からも発見されている。

この竈は土師質で，上面に甕をのせる為に直径17cmの穴があけられている。（考古学研究室蔵）



11　都府楼図巻　1巻　幅 66cm　長さ 868cm

この絵巻は大宰府政庁を中心として左右に大厦高閣，寺社の建物をならべ，府の繁盛の姿を想像して画いたものである。図は墨絵に着色したもので，東は安楽寺，宝満宮より，西は国分寺，水城などを描いている。都府楼の東には観世音寺，聖廟（学業院）がある。建物の配列には実を伝えたものもあるが，部分的には単なる想像で描かれた所も多い。すべて殿堂中心であるが，近世中国風の建物や風景が加味され，全体として江戸以前にさかのぼらせることはむづかしい。この図もともと写しで，これとよく似た模写図が日田市の後藤家にもあったが，今所在を失している。九大図書館本には，巻末に「筑紫考之言葉」という一文がついている。「深江の僧慧源しるす」と末尾にあるが，文の内容は直接図巻とは関係なく，筑紫の沿革や語源などの考証である。僧慧源の伝記も明らかでないが，いずれ近世末の書体で，模写の年代もその頃であろう。（附属図書館蔵）

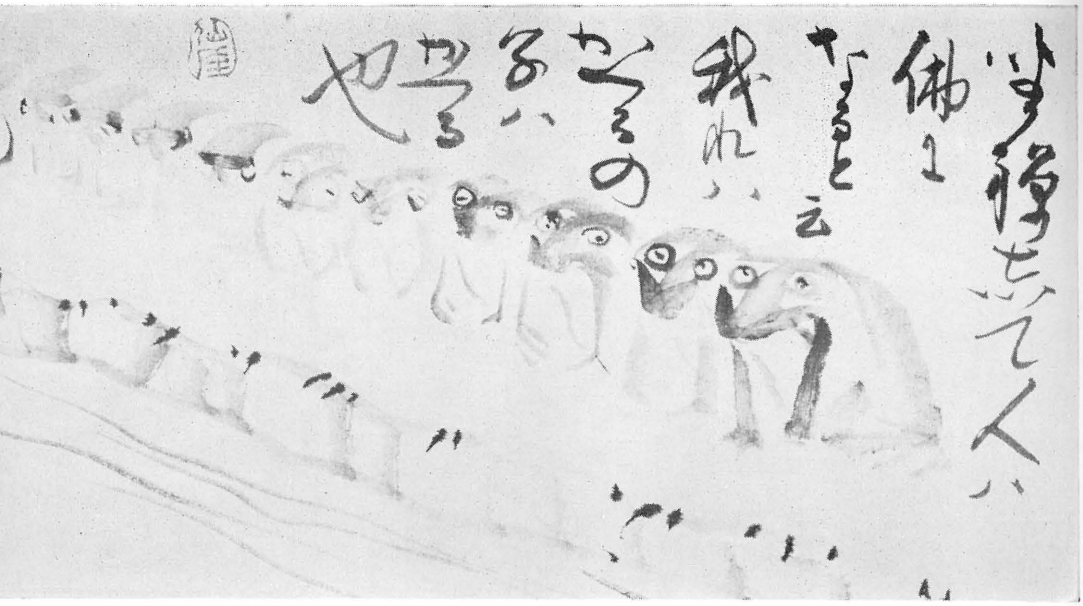


12　蒙古襲來画巻物　2巻

紙本彩色　巻物　　幅 40.0cm
長さ　上巻 2255cm　下巻 1821cm

蒙古襲来絵詞は，元寇の資料としてもっとも重要なものであるが，原本（現在御物）は，諸家を転々とする間に缺落錯簡を生じ，かって肥後の画家福田太華（1796～1854）が復原謂巻を試みたにもかかわらず（田能村竹田「竹田荘師友画録」参照），現在なお錯簡の問題を残している。

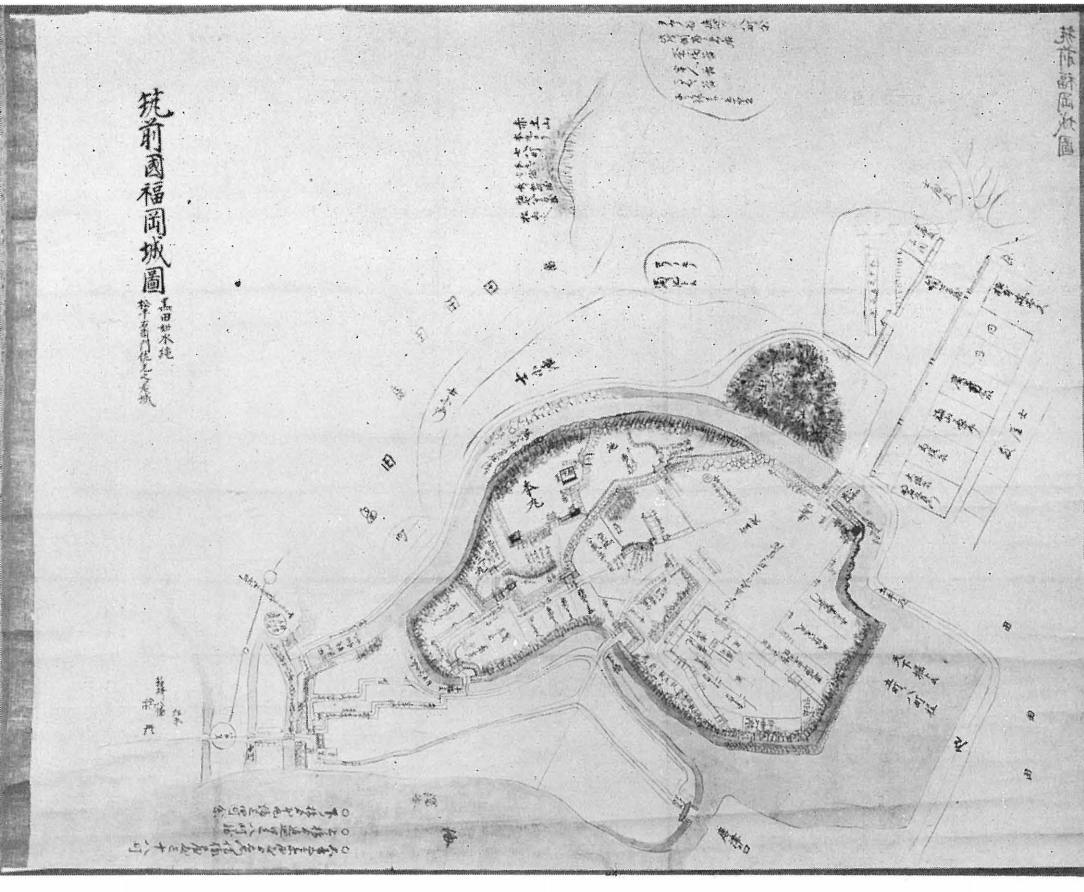
今日伝っている蒙古襲来絵詞の模本は，十数種を数えるが，九大本は，その外箱に「肥後國阿蘇宮藏画巻物寫蒙古襲來画巻物　臥游舎藏」とあり（考古画譜参照），この模本の原本が阿蘇宮に蔵されていたことがわかる。九大本には，その詞書や絵の位置の御物本と違った箇所や，御物本では損じて読めない文字が明瞭に書かれている箇所があるなど，錯簡問題の研究にとって一つの参考資料であろう。（附属図書館蔵）



13　仙厓筆　群蛙図　紙本墨書　掛幅　横49cm　縦25cm

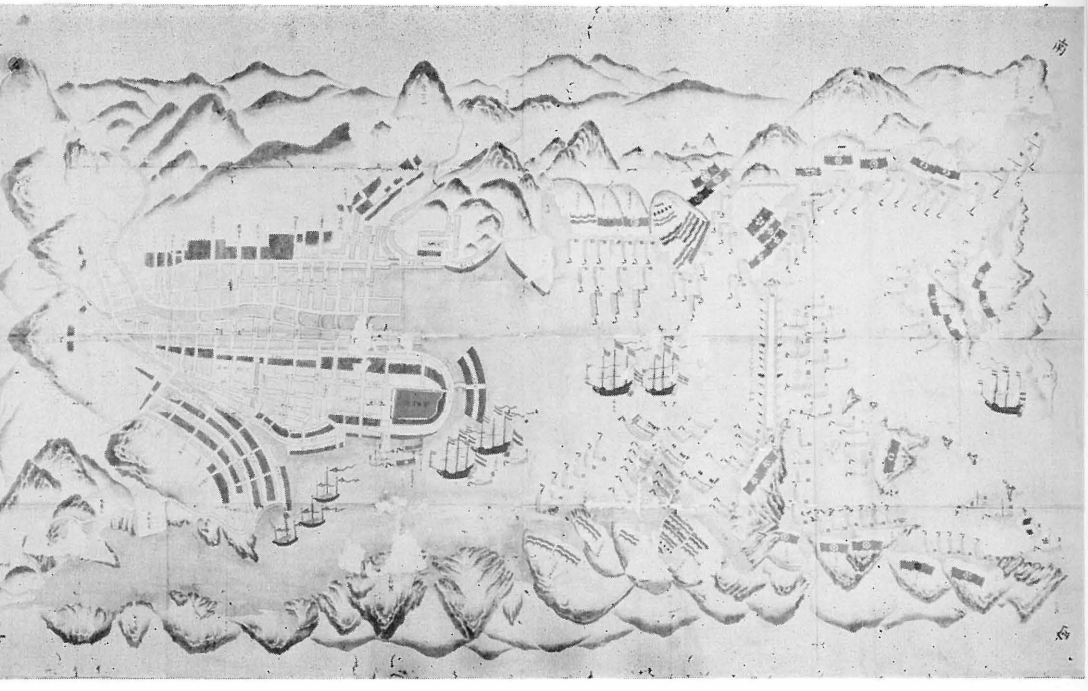
仙厓(法諱義梵，1750～1837)は，美濃国の生まれであるが，天明8年(1788)(39歳),「扶桑最初禅窟」である博多の聖福寺の第123世の住職となり，文化8年(1811)(62歳)，同寺山内の虚白院へ退休した。天保8年(1837)，88歳で遷化するまで，その禅余の筆になる戯画は，その諷逸と諧謔をもって特異の禅風を発揮し，人を驚倒させるに足るものであった。

文学部には，仙厓の遺墨31点，遺墨の写真複製の額53点，大黒天の彫像1点，山崎朝雲作の仙厓像などがあるが，これらは，故 中山森彦 名誉教授（医学部外科学担当，昭和27年歿）が深い鑑識眼をもって生前に蒐集あるいは作製されたものであり，昭和35年（1960)，遺族によって本学に寄贈されたものである。（文学部蔵）



14　筑前國福岡城図　横 100cm　縦 80cm

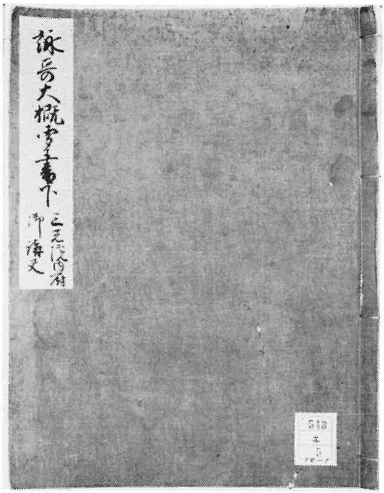
慶長5年（1600）筑前に入国した黒田長政は，一旦名島に入城したが，この地が手狭であることを考えて，新たに草が江の入江につき出た那珂郡警固村の福崎とよばれる岡を中心に福岡城を築いた。福岡とは黒田氏の出身地備前福岡にちなんでつけたものである。築城に際しては，長政自ら指揮をとり，朝鮮の晋州城を手本に築城したといわれ，造形の美よりも，むしろ現実的・実際的な築城法が重視された。内城の広さは8万坪，石垣の上には祈念櫓・秋月櫓・屏風櫓・太鼓櫓など大小47の櫓があり，外部とは上の橋・下の橋によって北方の濠端と通じた。城の西には草が江の入江をひかえ，東と南には新たに堀を設け，東方の那珂川と結びつけた。これを肥前堀（佐賀堀）という。上図は三代藩主光之（承応3（1653）～元禄元年（1688））時代のもので，北方の濠に面した現在の平和台一帯の地域に，重臣たちの屋敷が立ち並んでいるありさまが知れよう。（九州文化史研究施設蔵）

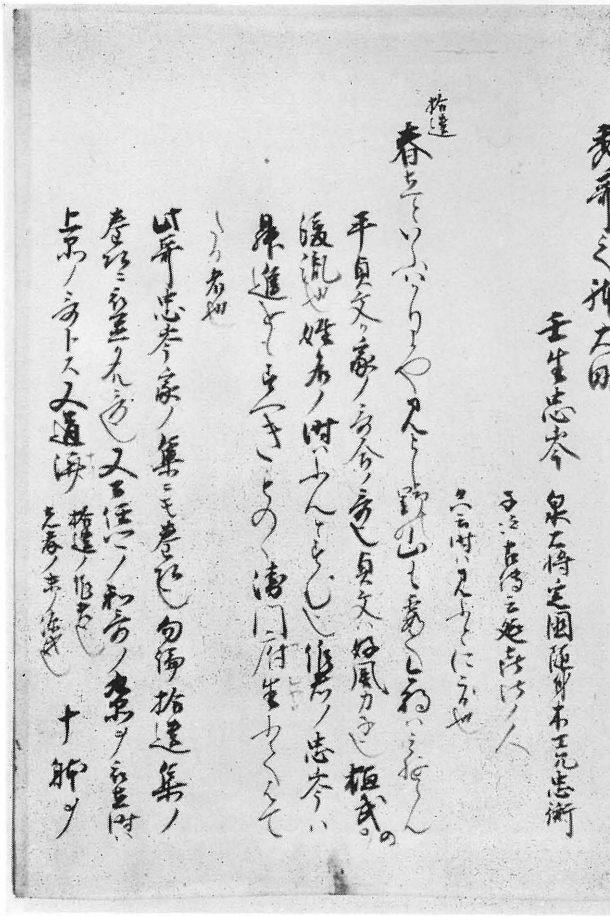


15　正保四年南蛮船警備長崎港図　横 188.5cm　縦 108cm

正保4年(1647)，マカオのポルトガル政庁はシケイラ・デ・ソイサを使節とする船隊を日本に派遣し，幕府当局に対し対日貿易再開を求めようとした。しかし幕府はこれを拒否し，使節を追帰すこととし，長崎港内に船橋を設けてポルトガル船の脱出を防ぐとともに九州諸藩の大名に命じて長崎の警備にあたらしめた。

本図はこの状景を写したものである。この事件は鎖国後の長崎にとって重大事件であっただけに数多くの絵図が作成せられたが，本図は幕末の模写ながらその中でも最も実況を正確に画いたものと考えられ，原図は海岸の地形，町割等からみて延宝期（1673～1680）の頃と想像される。初期の長崎町図としての史料的価値も高い。（九州文化史研究施設蔵）

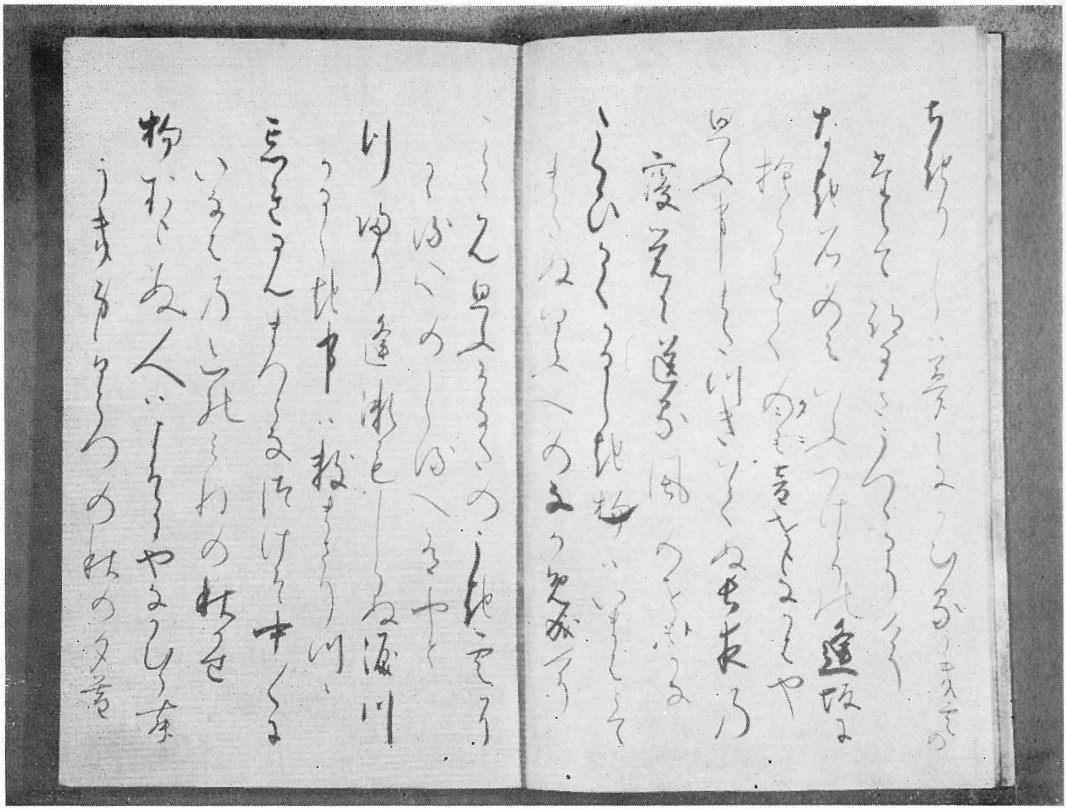




16　詠歌大概聞書　写2巻2冊　横20.3cm 縦25.8cm

三條西實枝（1511～1579）講義，細川藤孝（幽斎）（1534～1610）聞書，（上）中院通勝（1558～1610）筆・（下）幽斎筆。

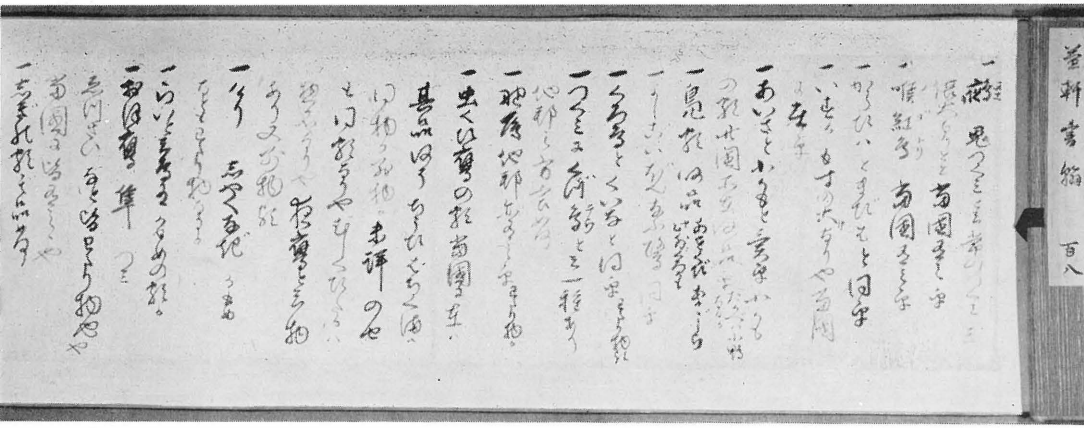
藤原定家の著で二条家歌学では重視した詠歌大概の講義の聞書で，幽斎は再度にわたり整理し，文禄4年（1595）には後陽成天皇の天覧に浴したもの。この書は文禄より後に，幽斎・通勝が浄書して，烏丸光広に送り，烏丸家に伝来したものであろう。後年，光広の孫資慶が寛文9年（1669）11月28日歿するに際して，その歌の門人であった幽斎の玄孫宇土細川家の行孝に形見として送ったのである。資慶（代筆，寛文9年（1669）11月25日付）及びその子光雄（寛文10年（1670）2月15日付）の書状が附いて，その間の事情を明らかにしている。この聞書の内容は，寛文8年（1668）詠歌大概抄と題して出刊流布したが，以上の伝来から見て，本書をもって最も正しい本文とすべきである。（附属図書館蔵　細川文庫）



17　閑事集　写1冊　横16.1cm　縦24.1cm

細川忠興（1564～1645）編，
自筆。全55葉　墨付43葉。

晩年小倉藩主，後に熊本に移り住んだ忠興は，幽斎の子として，茶道和歌にも通達していた。子孫に和歌を禁じたなどの噂も伝わるが，自らは，時には徒然草を手写し，閑事にはこうした書物をも作っていたのである。この書は，「見わたせば花も紅葉もなかりけりうらのとまやの秋のゆふくれ」（新古今所収）から「君とわれいかなる事を契釼むかしの世こそしらまほしけれ」（新千載集所収）まで，古歌343首を抄記したもの，格別配列に心を用いた跡もなく，心引かれ，興をもよおしたものを書き続けたものの如くである。或は何人かの為に作成したのかも知れない。（附属図書館蔵　細川文庫）

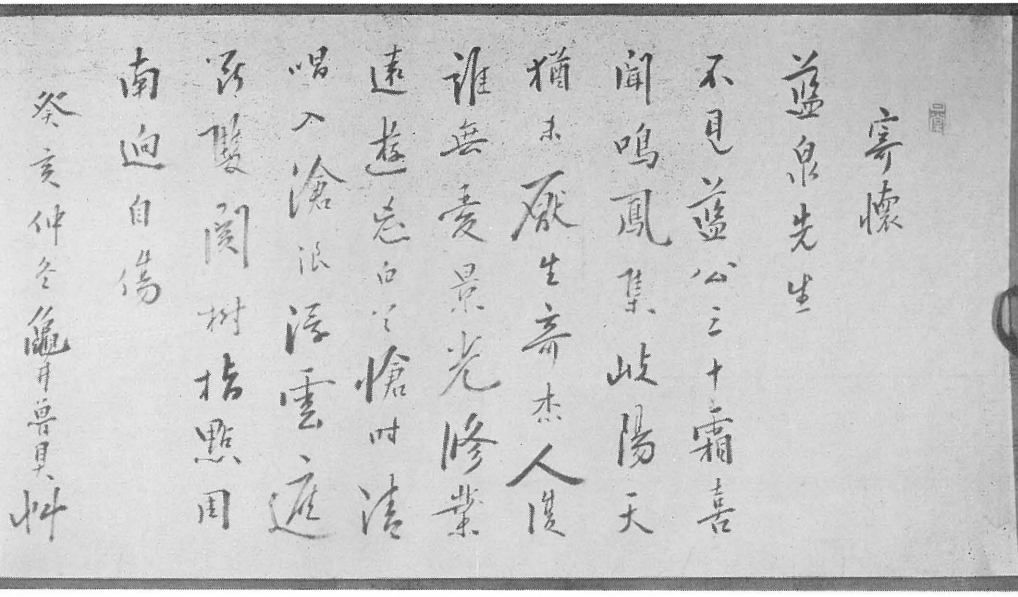


18　益　軒　書　簡

本書簡の大きさ
横51.5cm 縦16cm

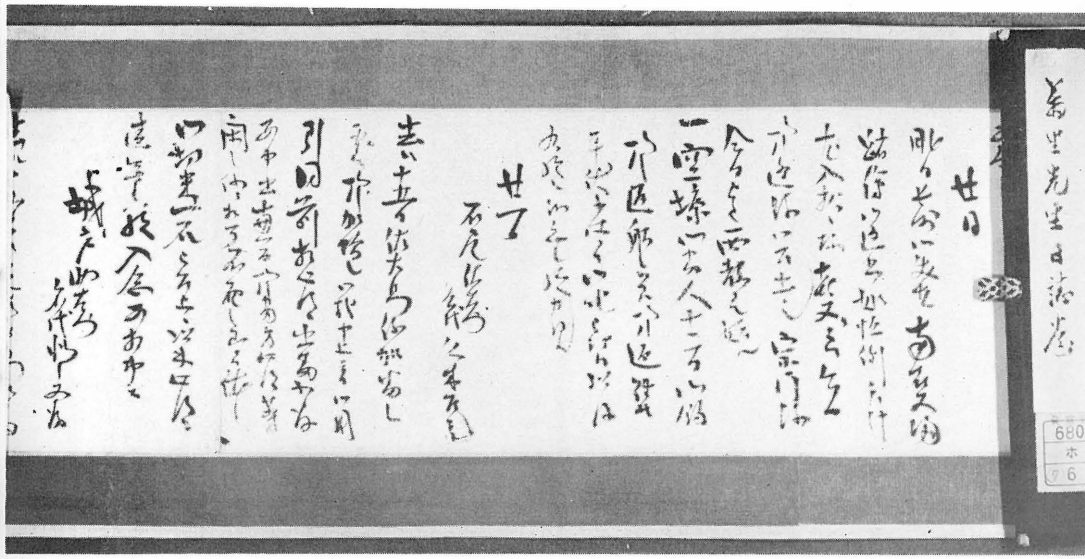
これは福岡が生んだ元禄前後の碩学，貝原益軒がその高弟竹田定直（春庵）に宛てた書簡1千余通の中の一通で，郷土史家故伊東尾四郎氏が調査整理し，折半して九大附属図書館(542通109巻)と福岡県立図書館（県文化会館内）とに分割購入したものである。

書簡はその内容から「家譜」・「風土記」・「編著」・「書籍」・「雑」などに分類している。本書簡を通じ益軒の膨大な業績が定直の援助に負うところいかに大きかったかをうかがい得る。また「書籍」の項を精密に調査すれば，当時の出版文化，輸入書籍の販売径路などについて得る処は尠くないであろう。（附属図書館蔵）


寄懷
藍泉先生
不見藍公三十霜喜
聞鳴鳳集岐陽天
猶未厭生齊杰人復
誰無憂景光陰業
遠趨志白首愴叫清
唱入滄浪活雲遊
野鬢閑村枯懸用
南迴自傷
癸亥仲冬龜井魯具忱

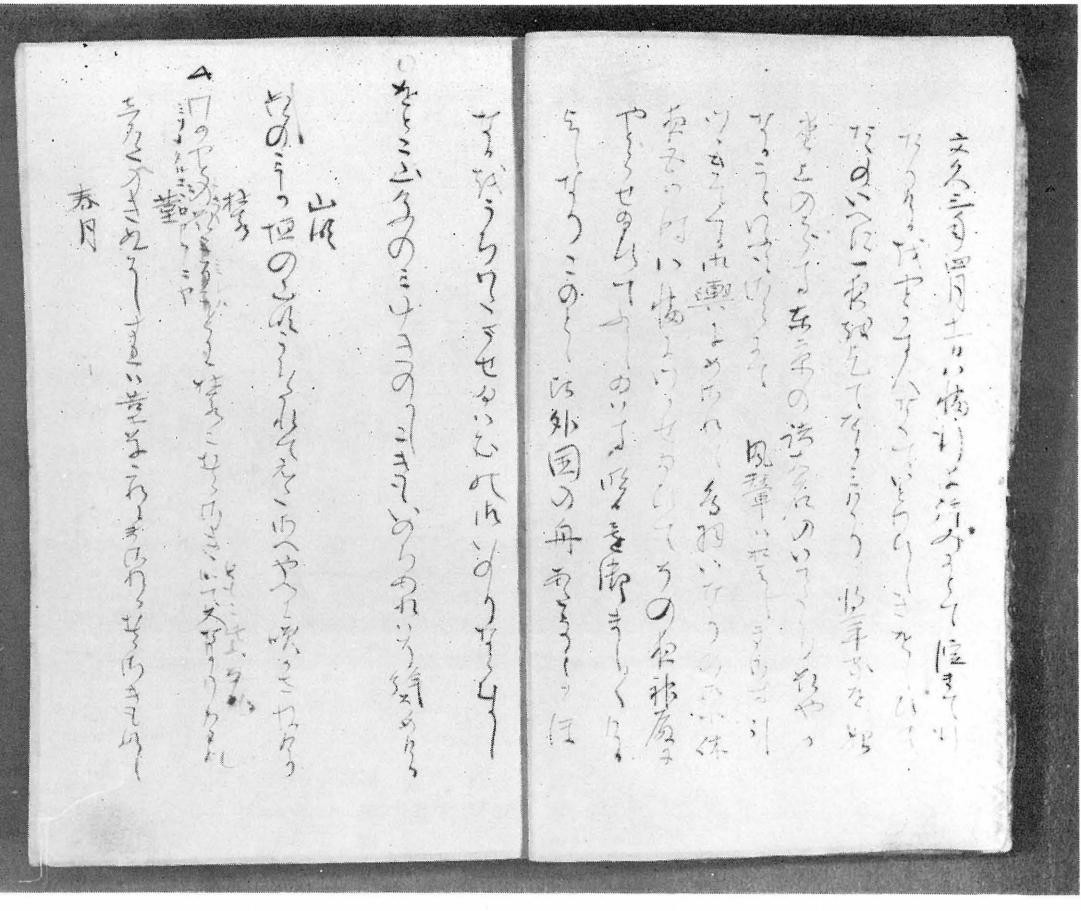
19　亀井南冥詩　横 58.7cm　縦 29.3cm

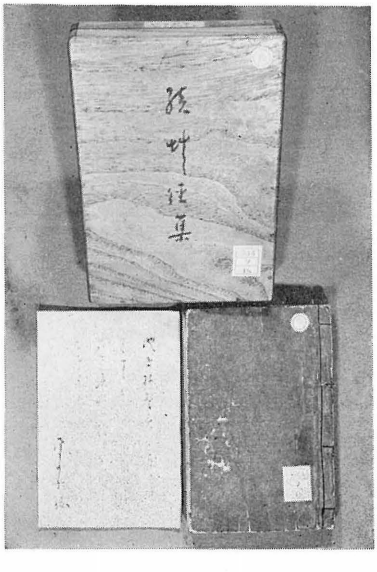
福岡黒田藩の儒者亀井南冥は，荻生徂徠の学統がやや退潮期に入った18世紀後半に，その遺風を西海に発揚した第一人者であり，その嫡男昭陽によって大成された独自の学風は，世に亀門学と称せられ，近世儒学史上に一異彩を放っている。いわゆる寛政異学の禁の強行によって，藩黌教官の地位を追われた南冥は憂憤と寂寥の情をわずかに詩文に託しつつ晩年を送り，今もなお人の胸を打つかずかずの佳篇を残した。ここに掲げた七言律詩は，享和3年（1718）癸亥11月（61才），彼の三十年来の知己である島田藍泉（周防徳山藩の儒僧）にあてたものである。相次ぐ悲運に亀井家の資料はほとんど焼失・散逸し尽したが，幸い島田家では藍泉の嫡孫に蕃根（明治仏教界の功労者）が出て，よく家伝の資料を整理保存し，近年に及びその遺族から，南冥・昭陽の書簡・詩文をはじめ，両家親交の跡を物語る百余点の資料を，一括本学に譲渡された。これらはひとり亀門学のみならず，西日本における徂徠学の動向・業績を探る基本資料となるものである。（中国哲学研究室蔵）



20　萬里先生日誌巻　写 1巻　掲載部分の大きさ　横 45.5cm　縦 17.2cm

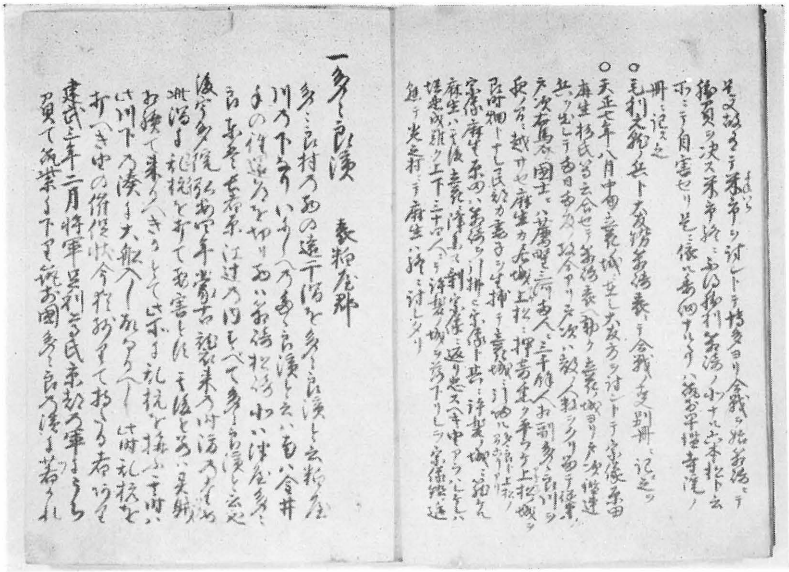
帆足万里(1778～1852)著，自筆。九州日出の辺陬にあって，当時日本の儒学界をして，学西せりと称された万里の公用日記である。彼は天保3年（1832）55歳，挙げられて日出藩家老となり，藩政改革にあたり，天保6年（1835）これを辞した。この間の公事を詳細にしたためた日記は，天保3年（1832)の1・3・7・8・11月，天保5年（1834）の，1～8月，10月の分は，小野竜瞻編帆足万里書簡集に抄出翻刻を見た。この一巻も同じ種類で，天保3年（1835）（或は4年）の2月，一ケ月間のものである。日々の記事は，そのまま日出藩政史の資料であると共に，寡孤，貧窮をあわれみ，殊に詳に記載した裁判の記事は，信賞必罰であって，万里の試みた儒学政治の姿を物語っている。（附属図書館蔵）



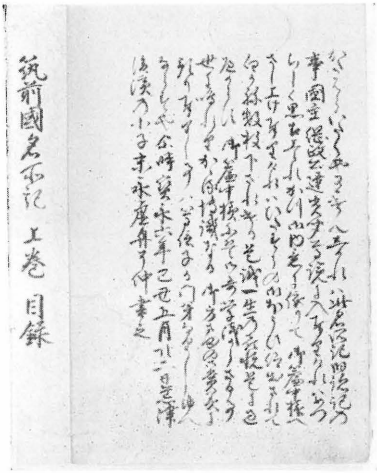


21　続草径集　函入1冊　横 12.3cm 縦 18.3cm

大隈言道著，自筆歌集の稿本。和装袋綴，薄紺表紙（もと渋茶色絹布貼りであつたが，剝脱が著しい）。題簽および問題を欠く。第1丁表(空白)に「梅野蔵書」の印（故梅野満雄氏蔵印）を押す。墨付168枚，第1丁裏より各葉11行乃至12行に書し，文久3年（1863）より慶応4年（1868）まで晩年6年間の作歌総数4289首を収める。歌頭にまま朱筆合点，あるいは○●，また墨筆にて△等の符号を入れ，添削の跡も見られる。本書を「続草径集」と名付けたのは，故佐々木信綱氏であって，函蓋に同氏筆の書名を見，またその命名の由を2葉の和紙に著し収める。ただし後の58丁は別けて別冊となし，現在天理図書館の蔵（92・26—61）となる。天理図書館稀書目録，和漢書の部第2・664（150頁）参照。（附属図書館蔵）



筑前宝鑑　古城古戦場記　巻之二

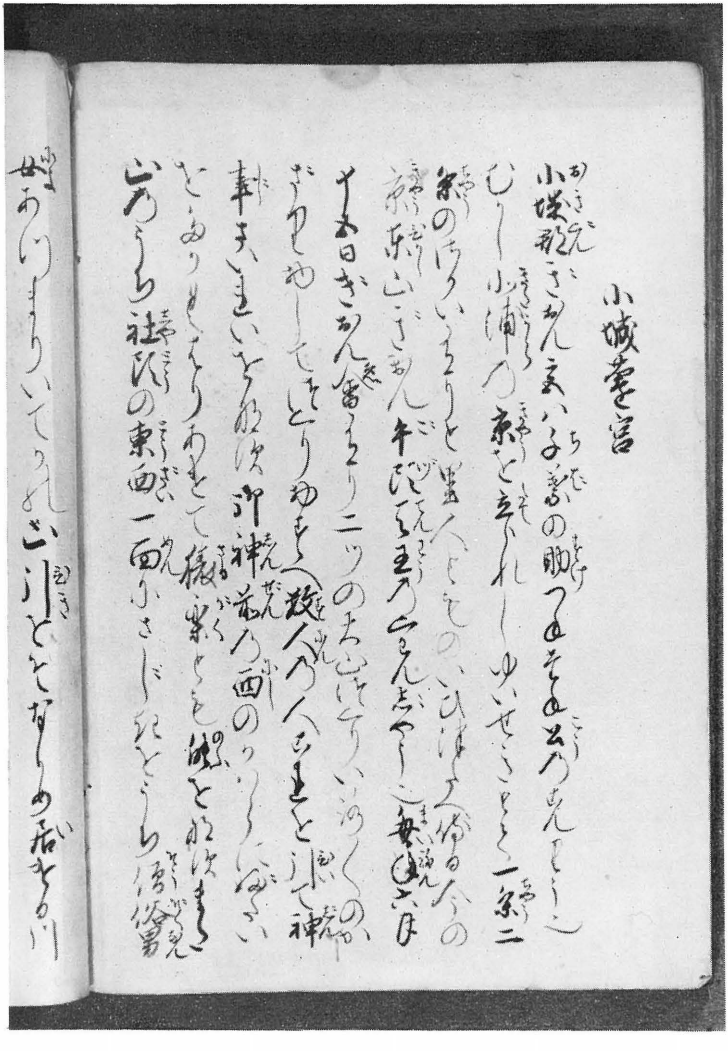


筑前國寶鑑　名所記　巻第上

22　筑前國寶鑑　写9巻 9冊欠

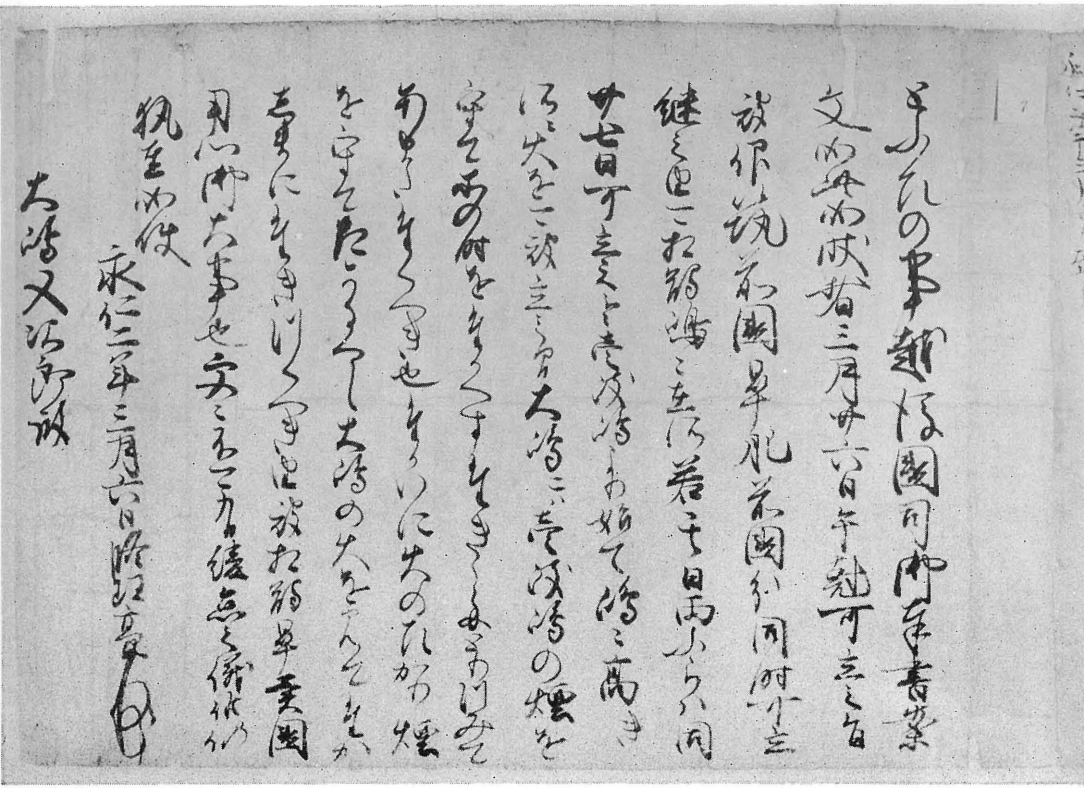
横 18cm 縦 26cm

末永景順(虚舟)(1635～1726)著，自筆。古城古戦場記3巻・寺院記3巻・名所記2巻・舊跡記1巻 計9巻9冊。寶鑑はこの外に神社記7巻・寺領録・廃寺記・郡村記・惣目録各1巻計20巻20冊をもって完全とする筑前一国の分類型式の地誌である。虚舟は貝原益軒の筑前続風土記編纂の助力者であり，殊に藩への献上に際して，全巻を筆写した人物である。虚舟のこの書著述の志は既に延宝年間に発し，元禄13年(1700)には古城古戦場記に序し，名所記は宝永6年(1709)の序をもつ。古文献を渉猟し，現地を踏破して調査編述につとめている。その間続風土記の編には，彼の知識をそれに加えた所もあったろうが，それから得る所も多く，屢々続風土記初め益軒の著から引用する。宝永6年(1709)浄書後の補筆も見えて，彼の畢生の著と見るべきものである。(附属図書館蔵)



23　西肥名所旧跡拾遺記　写 1冊　横 20.3cm　縦 27.5cm

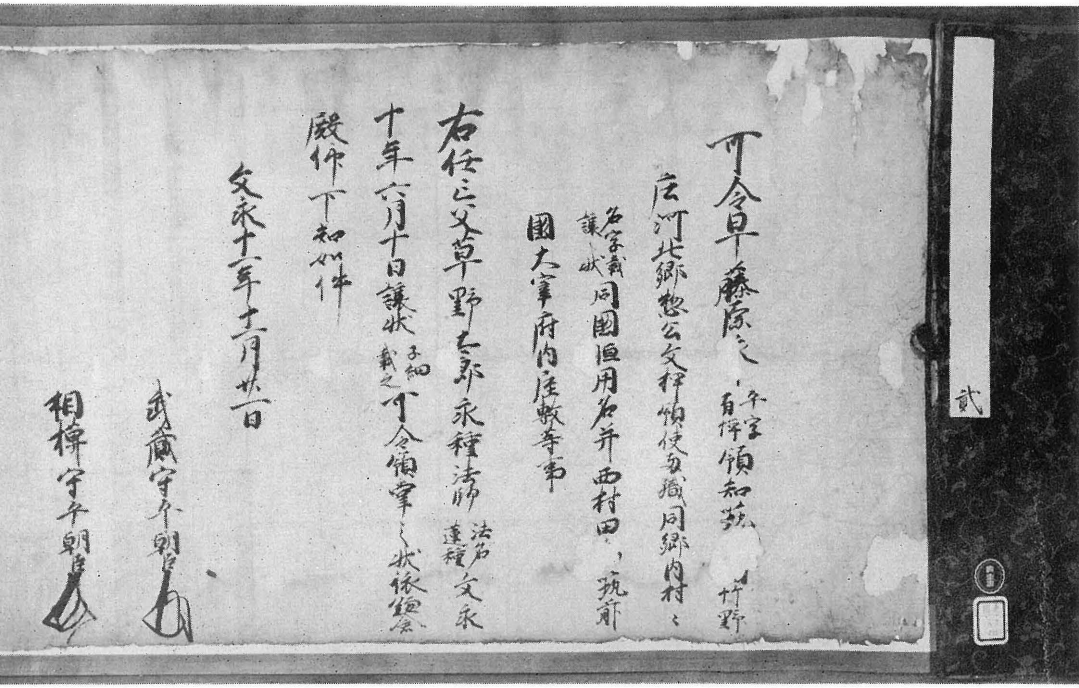
編者筆者未詳。近世中葉の写。全82葉。内題なく，表紙に墨書したこの外題は本文と別筆である。内容は寛文5年（1665）の頃大木惣右ヱ門英鐵が，公命により調査した鍋島藩領内の神社仏寺の縁起の集，肥前州古跡縁起によるものの如くである。肥前叢書第1輯所収の古跡縁起と比較すると，縁起が87ケ所をのせるに対し，これは44ケ所を収める。文章は縁起の方が先立つものであるが，前者の生硬さを改めて，仮名を多く読み易からしめている。44ケ所の配列が古跡縁起と同一の所と乱れた所を混じるのは，この書の転写者の恣意による抄記の結果かとも想像され，元来は，87ケ所を完備した古跡縁起の異本であったかと思われる余地もある。今の姿においても，書写年代の古いこの書によって，肥前叢書所収本の誤写を正し得る所が，かなり多い。（国文学研究室蔵）



24　肥前守護北條定宗書下（来島文書）

横 45cm
縦 30.1cm

来島文書は全部で3巻，もと福岡藩士来島家に伝来したものであり，昭和7年購入したものである。来島家は肥前国松浦郡の大島よりおこり，松浦党の一員として活躍した肥前国御家人大島氏の後裔である。本史料は肥前国守護北条定宗より大嶋又二郎宛の書下しである。鎌倉幕府は文永・弘安の役後，元の再来を恐れて博多の海岸を中心に厳重な警固を怠らなかったが，緊急事態が発生した時の連絡方法として海上の島々間には「とふひ」，すなわち，烽火が準備されていた事が知られる貴重な史料である。烽火の焚き上げ順序は壱岐島より始めて，大島がそれをうけつぎ，大島から更に鷹島にリレーされている。おそらく，烽火演習を行うために各島々に準備させ，試みたものと思われるが，永仁2年(1294)といえば弘安の役後すでに13年経過しているにもかかわらず，厳重な異国警固を続けているという事は，元軍の再来をいかに恐れていたかがうかがわれよう。
（国史学研究室蔵）

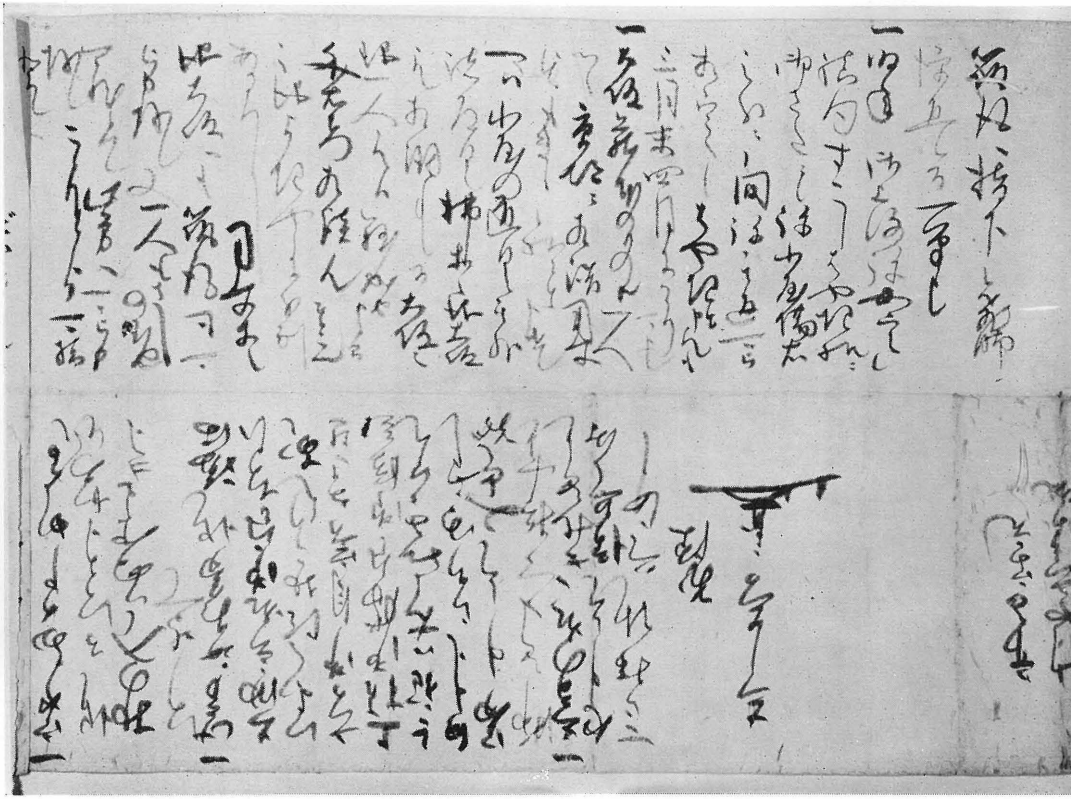


25　関東下知状（草野文書）

横 57cm
縦 35.5cm

草野文書は，筑後国に鎌倉時代以来の豪族として知られた草野氏本宗に伝えられた文書で，現在総数４巻62通（中世のみ）を数えることができる。昭和39年，草野家末裔の小柳里美氏より購入したものである。

ここに掲げたのは，草野文書の中でも最も古く，庶子家永平の所領に関するもので，鎌倉時代初め「吾妻鏡」にも見える草野永平の子永種よりその養子四郎永平に譲られた所領安堵のための関東下知状である。文永10年（1273）6月の沙弥蓮種（永種）譲状（草野文書１号）に基づいて幕府より相続が認められたのである。時あたかも蒙古が博多湾に迫った僅か１月後のことであって，草野氏一族も防戦に当ったことは周知の事実であるが，元寇戦後のあわただしさの中で発給せられたものであろう。本史料に於て，鎌倉期草野氏の所領構成の一部がうかがわれるだけでなく，草野氏の如き比較的所領規模の大きな御家人は，あたかも鎌倉に御家人が屋敷を構えていたと同様に，九州では大宰府に居屋敷を所有していたことが知られる貴重な史料である。或は草野氏が平安時代以来大宰府々官でもあった関係によるかも知れないが興味深い。なお署判を加えているのは執権相模守北条時宗と連署の武蔵守北条義政である。（国史学研究室蔵）

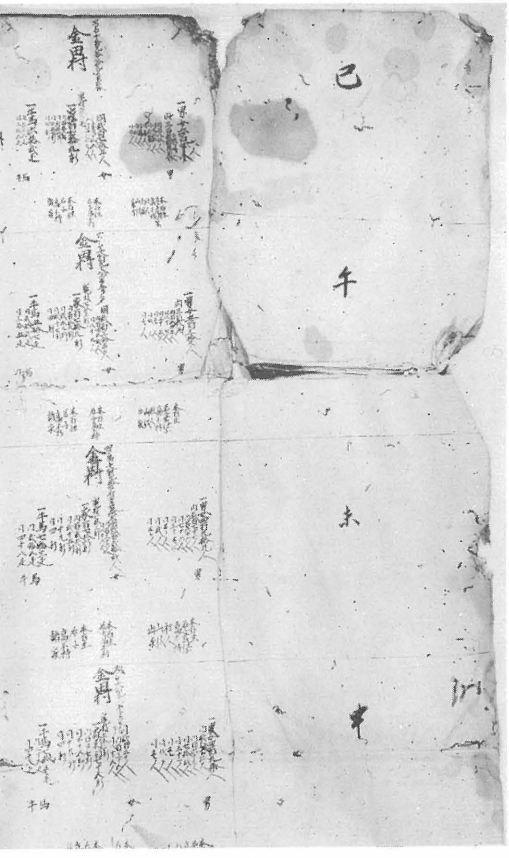


26　立花宗茂書状（冨士谷文書）

横 54.5cm
縦 35.5cm

冨士谷文書は，冨士谷修一氏が昭和34年に当研究所に寄贈されたものである。同家は柳川藩の京都留守所をしていた家で国学者冨士谷御杖の出た家である。同家文書中には，戦国末期武将として活躍した立花宗茂の書状9巻180通が含まれており，幕藩体制確立期において，諸大名が京都に駐在させた役人の果した役割，大坂蔵屋敷との関係等を解明する糸口となる史料が多い。

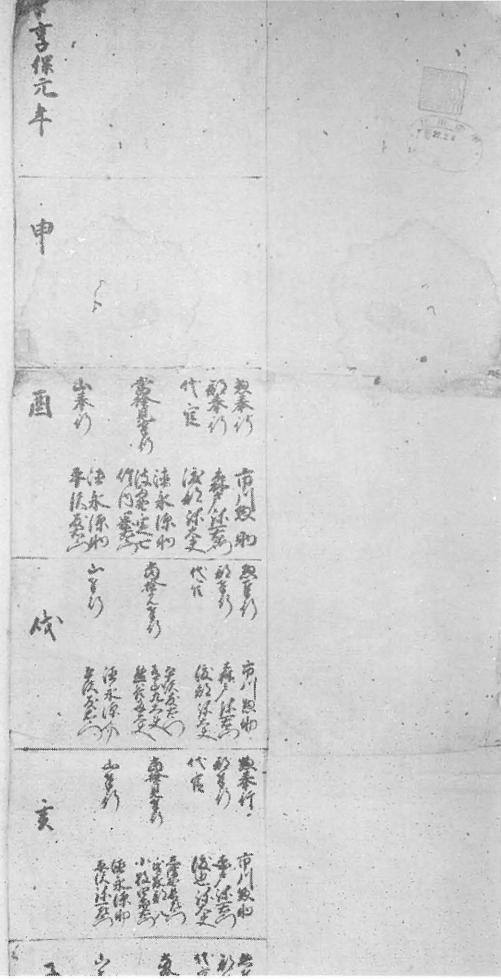
ここに掲げた書状は寛永10年（1633）のもので，晩年将軍の御伽衆となった宗茂が，将軍家光の上洛宮中参内が明年に行われるとの情報を京都に申送り，大坂蔵元とも連絡をとって軍勢駐屯設営の準備を指示したものである。又この時，家光の庶兄，駿河大納言忠長の自害の報に，家光が大いに立腹したので「何事もらちあき申さず」と報じているが，これは忠長改易をめぐる動きが大名にいかに映じていたかを示す史料として興味がある。（九州文化史研究施設蔵）



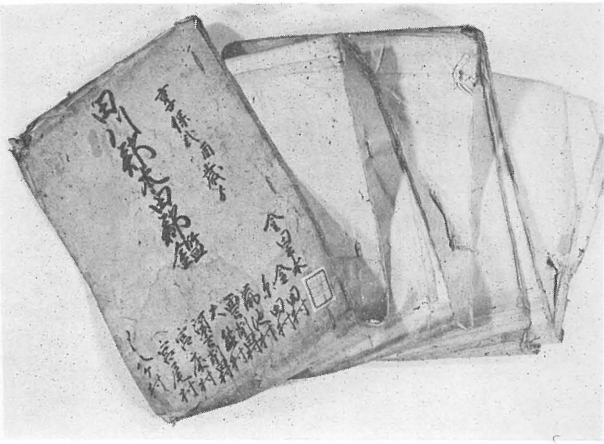
27　　田河郡人畜帳　元禄２年　　本頁　横23.5cm　縦156cm
28　　田川郡本田郡鑑　享保２年　次頁　横20cm　　縦162cm

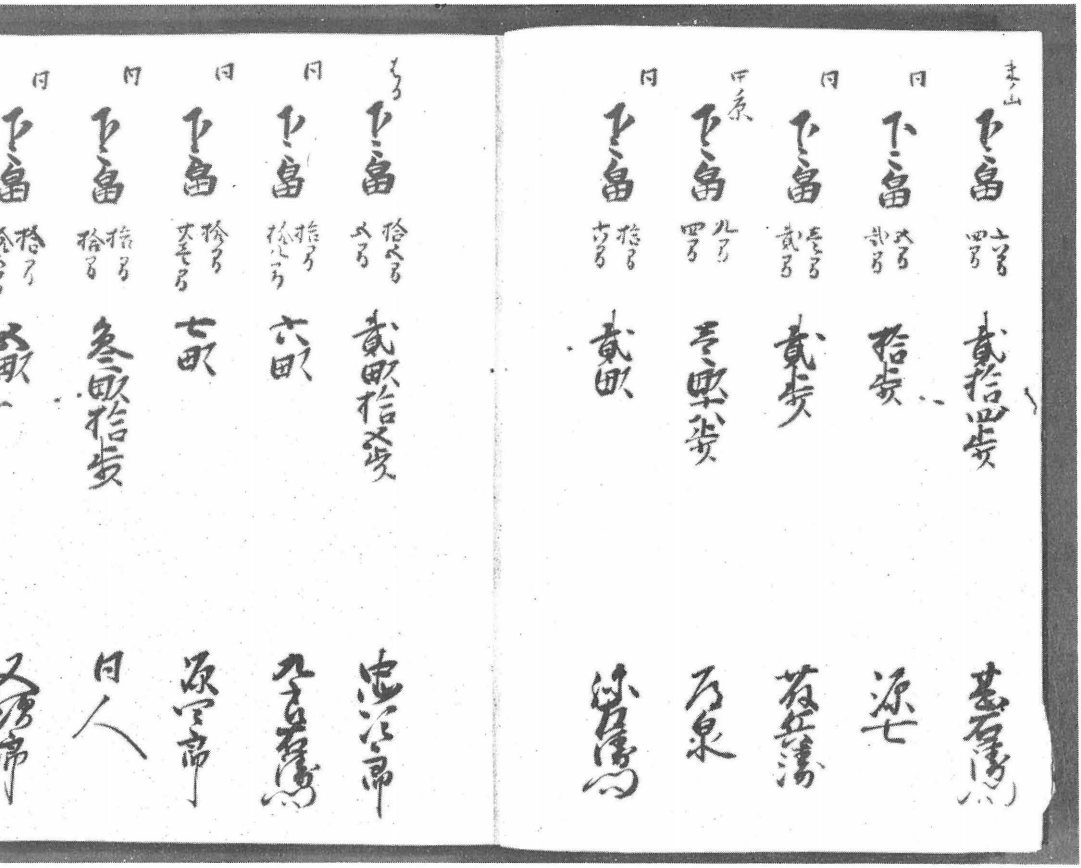
九州文化史研究施設には岡山県二島・守屋家文書(約１万点)，熊本県御領・石本家文書（約１万点)，福岡県金田・六角家文書(約７千点）をはじめ，主に九州各地の大庄屋家・庄屋家・商家などに旧蔵されていた近世地方史料約20万点を蒐めている。このうち六角家(旧大庄屋)文書の中から，「人畜帳」と「郡鑑」の２点をここに掲出したのであるが，両帳には内容や形態のうえからみて共通の特徴がある。

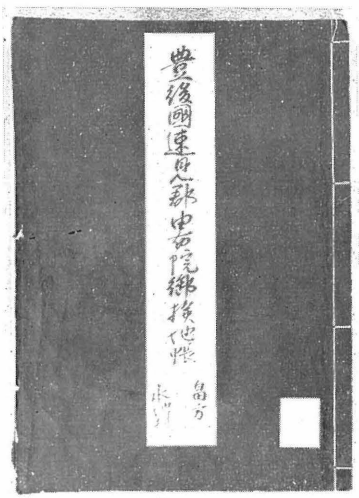
人畜帳は元禄２年(1689)より同９年(1696)にいたる８年間，小倉領田川郡６手永の一つ，金田手永10か町村について，年次別にそれぞれ男女別，階層別（本百姓・名子・荒仕子・高不持・社人・出家・山伏・舟乗など）人数，家数，竈数，牛馬数，船数の諸項にわけて列挙したものである。いわゆる明細帳の類に属するが，この種の書上げとしてはもっとも初期の成立にかかるものではなかろうか。人畜帳という称呼は，「手永」制度などとともに，寛永年間(1624～1643)熊本に転封された細川氏領有時代の名残りであろう。郡鑑は享保元年(1716)より同11年(1726)までの11年間にわたり，同じく金田手永８か村のそれぞれについて，総奉行以下の諸役人名および検見の結果による村むらの実高を列記している。



両帳は成立年代がややずれているが，ともに約10年間の村勢の動態概要を一覧表として示す一種の統計書となっている。このため，開いてみると年次別の横帳をタテに継ぎ合せた形となっており，これを保蔵や携行の便宜のためであろうか，ふだんは折本のように畳んでおくようになっている。工夫のあとがうかがわれておもしろい。（九州文化史研究施設蔵）



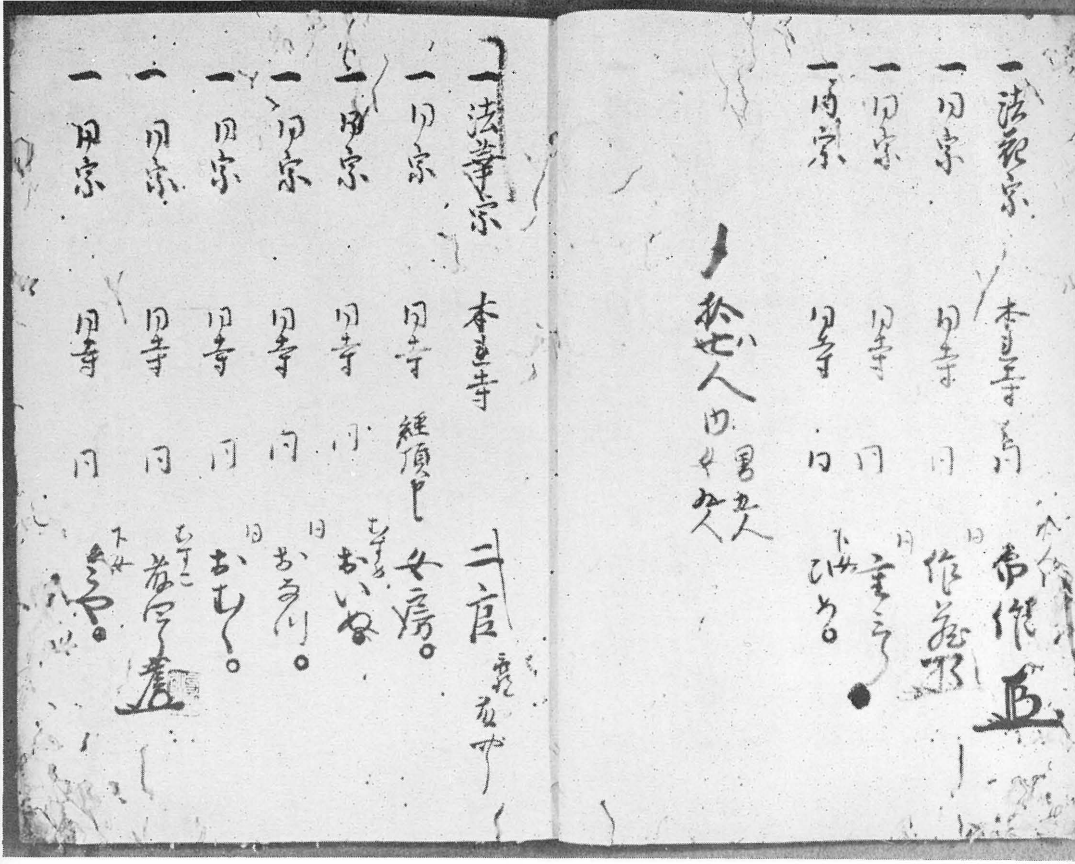


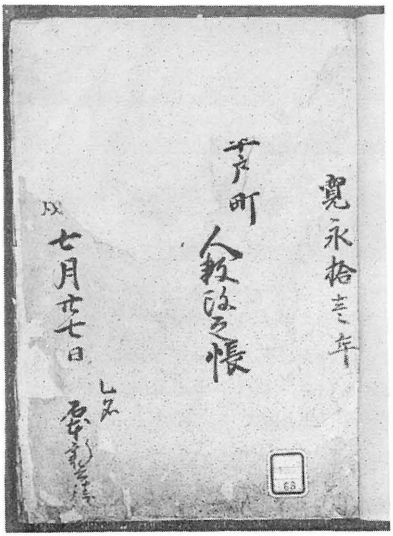


29　豊後國速見郡由布院御検地帳

畠方水地村　　横 20cm 縦 27.2cm

九大の附属図書館に収める「細川文庫」のなかに，豊後国関係の近世初期検地帳が20冊存在する。写真はそのなかの一つ，速見郡由布院のうち，水地村の畠方検地帳の一部を示したものである。検地帳は検地の結果を記載した帳簿で，年貢・諸役などの賦課の基礎となった基本的帳簿である。ふつう村単位につくられ，耕地一筆ごとに，その所在小字名・種類・等級・面積・作人を併記する。慶長5年（1600）の関ケ原の役後，豊前八郡と豊後二郡（国東・速見）は丹後宮津の細川忠興に与えられたが，忠興は入国翌年の慶長6年（1601）から検地をはじめ，同14年（1609）および元和元年（1615）にも検地を実施した。このうち写真は元和元年（1615）の検地の結果を示したもので，一般の検地帳の記載方式と変わりはないが，等級は上々・上・中・下・下々の五級を用いている。末尾に番頭である山路太左衛門と郡奉行の井上六右衛門の署名がある。（附属図書館蔵）





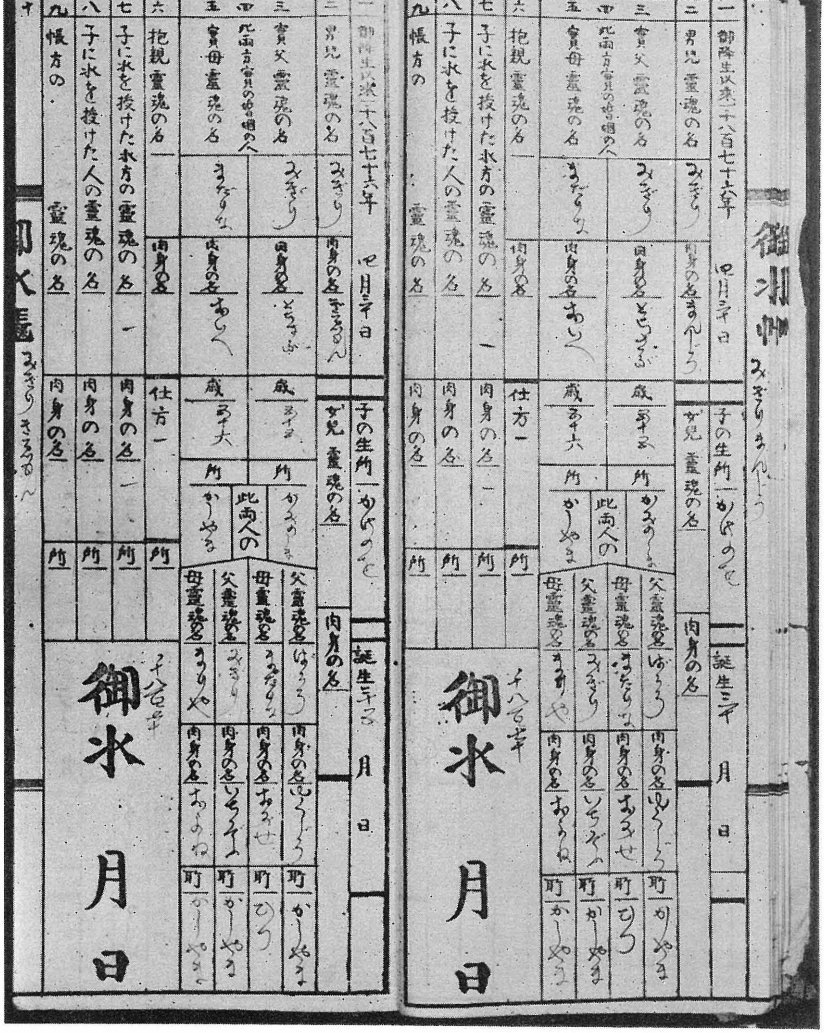
30　平戸町 横瀬浦町　人数改之帳　1冊　横 22cm 縦 30cm

本人別帳は長崎平戸町の寛永11年（1634）のものである。元来人別改帳又は宗門改帳は徳川幕府の宗教政策として著名なものであるが，これが制度化するに至ったのは寛文年間（1661～1672）と考えられる。なおそれ以前寛永年間（1624～1643）以降各藩において行われていた。その中でも本人別帳は現存するものの最も古いものの一つと考えられる。寛永11年（1634）といえばなお鎖国体制完成以前であり，ことにキリシタン取締り中心地であった長崎の人別帳は内容においても極めて興味深いものを含んでいる。唐人二官の名や，高麗人で南蛮人と関係して後マカオに追放された返土清庵が記載されているなど内容形式においても宗門改研究の貴重な資料である。 なお平戸町は総計54戸，339名に上り，ほとんど転びキリシタンである。（九州文化史研究施設蔵）

31　長崎絵踏資料　横27cm　縦25cm

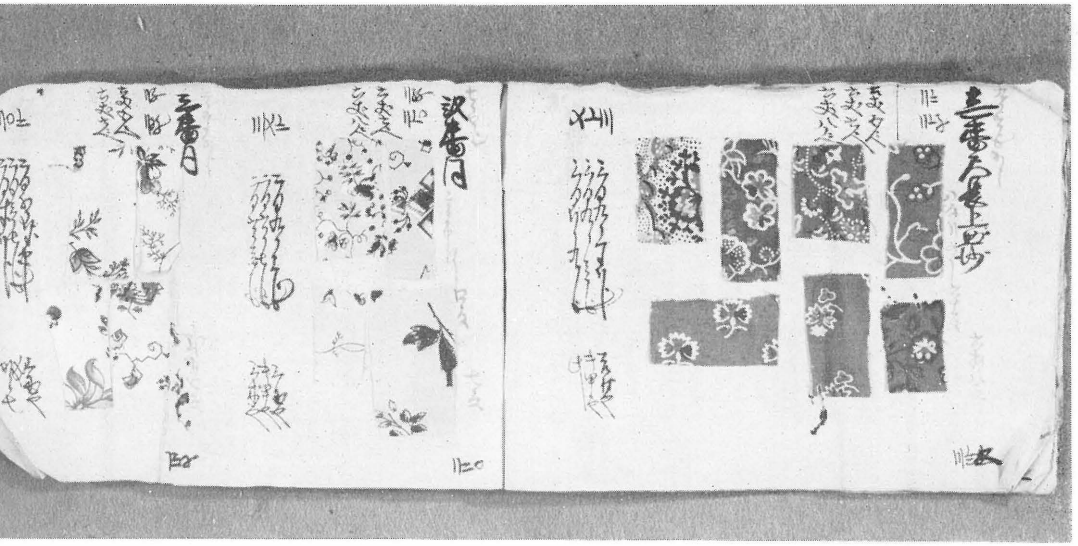
慶長末年徳川幕府によってキリスト教が全面的に禁止されたが，島原の乱後はその取締りも一段と強化され，すべての人が仏教の何れかの宗派に所属し，その檀那寺に登録されねばならなかった。宗旨改が行われ役人立会の下に踏絵をふませられて，キリシタンでないことを立証せねばならなかった。

ここに掲げた写真は，天明3年（1783）のもので，長崎市中東古川町に住む仁平次一家が，同市中の本石灰町へ移住するに当って，居住地の町世話役である乙名が転出先の乙名にあてこの者にはこの年の絵踏を行いキリシタンではないことを保証したものである。当時の宗教統制の行われた社会の実態を知る上に貴重な資料である。（九州文化史研究施設蔵）



32　御　水　帳　　横 15.3cm　縦 35cm

此書は明治初期のキリスト教信者の洗礼台帳で，長崎大浦天主堂の副司教をしていたサルモンと云う牧師が所蔵していたものである。明治5年(1872) にキリスト教禁制が解除になってから作成されており，長崎港外蔭尾地区の信徒の台帳である。この地域は禁教時代からキリシタン信仰を続けていた土地であり，この帳面の中にもキリスト教解禁以前の1866年（慶応2年）に既に洗礼を受けた人の記録も出ており，隠れキリシタンの存在を実証していて興味深いものがある。この帳面には処々書違えた所にサルモン牧師の訂正印が押されているので，この筆跡は恐らく彼自身の自筆であると考えられる。（九州文化史研究施設蔵）

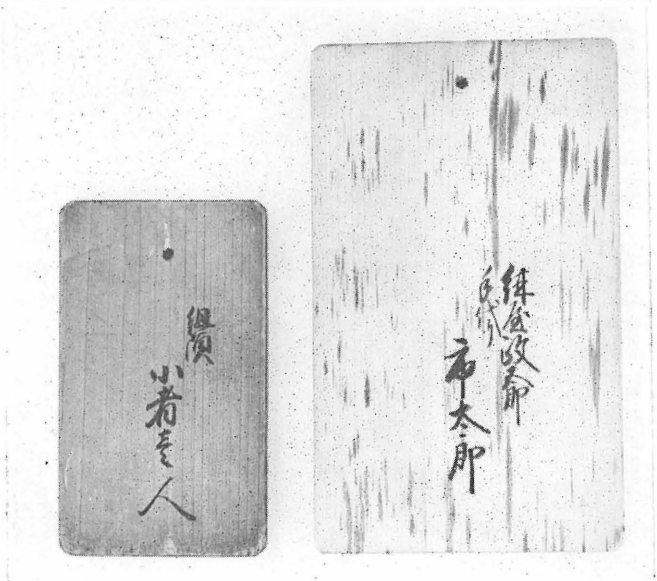


33　申紅毛壱艘切本帳

横 12cm
縦 17.5cm

徳川幕府は慶長末年キリスト教の禁制を強化し，やがて寛永16年（1639）ポルトガル船の来航をも禁止して鎖国の体制に入った。従ってこれから幕末の開港に至るまで約220年間外国との貿易は，長崎に限られ，オランダ船・中国船のみを通して行われるようになった。故に長崎は西洋文化を摂取する唯一の窓口となったのである。

ここに掲げた帳面は，オランダ船が積んで来た布地の見本帳であり，これに日本の商人が入札を行って買い取った金額を記録した帳面である。これらの布地はオランダ商人が主としてベンガル，インド西部，マレー半島，ジャワ等の地域から仕入れて来たものが多く，当時既に現在とかわらぬ様な精巧な布地がどんどんと輸入されていた状況を知ることが出来，興味深いものがある。（九州文化史研究施設蔵）



34　　出島・唐人屋敷門鑑　　横6.7cm　縦11.4cm
横9.7cm　縦16.1cm

長崎の出島はもとポルトガル人を隔離居住せしめるために築かれた島であったが，ポルトガル船来航が禁止されて空地となり，寛永18年(1641)に平戸のオランダ商館をここに移し，オランダ人を居住させてここで貿易が行われた。扇形の出島には，長崎市中と同じく出島乙名が任命され，この島への日本人の出入は厳重に取締られた。この門鑑はその入門許可証で取締の実態を示す貴重資料である。

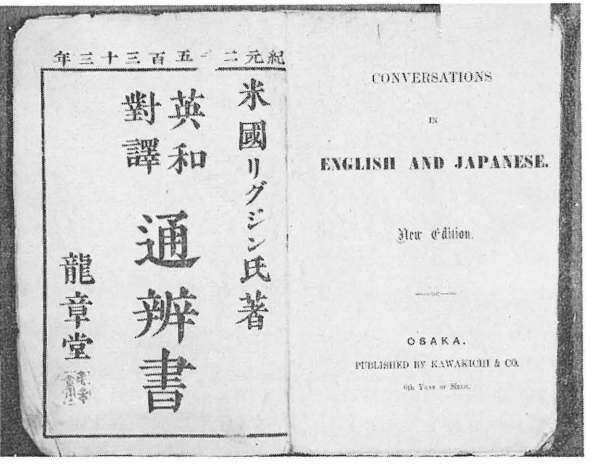
唐人屋敷は元禄2年（1689）に完成し，総坪数9373坪，総門内には乙名・唐通詞・其他取締関係者の屋敷があり，二之門内に唐人部屋・市店百七区等があった。屋敷内には，長崎奉行以下係役人・町年寄・唐人屋敷乙名・組頭・筆者・唐通詞関係者などの他は，この写真にある烙版がなければ入ることは出来なかった。しかし中国人はオランダ人に比べはるかに寛大な取扱をうけていたようである。(九州文化史研究施設蔵)

Are you well?	*So-na-ta ka-wa-ri no u-i ka*
	A-na-ta o-ka-wa-ri mo go-za-ri-ma-she-nu ka
I respectfully wish you joy	*O me-de to-o*
	O me de to-o go-za-ri-mas
Thanks, or I am thankful	*Ka-ta-ji-ke-no-o*
	A-re ga to-o go-za-ri-mas
Many thanks	*Chi-ka-go-ro o-o ki-ni*
	O-o-ki-ni a-ri-ga-to-o
I am truly thankful	*Ma-ko-to ni a-ri ga-ta-i*
	Ma-ko-to ni a-ri-ga to-o go-za-ri-mas
How can I presume? (to impose on your kindness)	*Na-ni ga sa-te*
	Na-ni ga sa-te o-ki
Would not dare, or presume	*I-ta-mi i-ru*
	I-ta-mi i-ri-mas
Beg pardon (for imposing on your kindness)	*Dri-o gwa-i*
	O dri-o gwa-i na-ga-ra
I have offended, or been impolite	*Shtsu-re-i*
	Go bu-re-i
I am putting you to a good deal of trouble	*So-no-ta ni go-ku-ro-o ka-ke-ru*
	A na ta ni go-ku-ro-o ko-ke-mas
Have put you to a good deal of trouble	*So-na-ta ta-i-gi de at-ta*
	A-na-ta go-ku-ro-o de go-za ri-mash ta
Stay awhile, or don't be in a hurry	*Ma-ta sha-re*
	O ma-chi na-sa-re
Come again	*Ma ta ki-na-sa-re*
	Ma-ta o-i-de na-sa-re
Come again soon	*Ma-ta ha-ya-ku ki-na-sa-re*
	Ma ta o ha-go o-i-de
Come often	*Chots cho-to ki-na-sa-re*
	O-ri o-ri o-i-de na-sa-re
Come at any time	*I-tsu de-mo go za-re*
	I-tsu de-mo o-i-de
What is your family name?	*Mi-o ji wa na-ni to yu-u ka*
	O mi-o ji wa na-ni to i-i-mas-ka
What is your given name?	*Na wa na-ne to yu-u ka*
	O na wa na-ni to i-i-mas ka

What is your added name?	*Go-o wa na-ni de go-za-ri-mas ka*
What is your name in full?	*Na ni-o ji wa na-ni to yu-u ka*
	Go she-i wa na-ni to no-o-shi-mas
What is your age?	*So-na-ta to-shi wa i-ku-tsu*
	A-na-ta o to-shi wa o i-ku-tsu
Where do you live?	*Do-ko ni ora ka*
	Do-ko ni o-ri ma-sa-ru ka
Where is your residence?	*Ya-de wa do-ko ka*
	Go ta-ku wa do-chi-ra de go-za-ri-mas ka.

THE LANGUAGE AND UNDERSTANDING IT.

The Japanese language	*Ni-pon ko-to-ba*
	Ya ma-to ko-to-ba
The language is difficult to learn	*Ko-to-ba wa na ra-i ni-ku-i*
	Ko-to ba wa ma-na-bi ni-ku-u go-za-ri-mas
Do not understand the language	*Ko-to-ba ga wa-ka-ran*
	Ko-to-ba ga wa-ka-ri-ma-shen
He understands it well	*A-re wa ko-to-ba ga yo-ku wa-ka-ru*
	A-no hto wa ko-to-ba ga yo-ku wa-ka-ri-mas
I am learning the language	*Ko-to-ba wo na-ra-u*
	Ko to-ba wo ma-na-bi-mas
Have only learned a little of the language	*Ko-to-ba wo sko-shi ba-ka-ri na-rwo-tu*
	Ko to-ba wo sko-shi ba-ka-ri ma-na-bi-ma-sh-ta
Will learn it by degrees	*Dan-dan-ni na-ra-wo-o*
	Dan-dan-ni ma-na-bi-ma-sho-o
Not able to speak the language	*Ko-to-ba wo i-i ye-nu*
	Ko-to-ba wo i-i ye-ma-shen
Able to speak it	*Yo-ku yu-u*
	Yo-ku i-i ma-su-ru
What language, or dialect?	*Na-ni ko-to-ba ka*
	Na-ni ko-to-ba de go-za-ru-ka
The language of the capital	*Ki-o to ko-to-ba*


紀元二千五百三十三年
米國リギンス氏著
英和對譯
通辨書
龍章堂藏
CONVERSATIONS
IN
ENGLISH AND JAPANESE.
New Edition.
OSAKA.
PUBLISHED BY KAWASHIMI & CO.
6th Year of Meiji.

35 リギンズ英和対訳通弁書

横 13.3cm
縦 19.2cm

著者 John Liggins 漢名 林約翰 (1829～1912) はイギリス生れの米国人，日本および中国で伝道に従事，1859年5月長崎に来て，聖公会派の最初の日本宣教師となった。滞在期間10ケ月のうち，長崎通詞に英語を教え，また一方かれらを師として日本語を学んだ。この日本語習得の結果が，1860年上海で印刷された Familiar Phrases in English and Romanized Japanese Shanghae (sic) である。英文に対して日本文は俗語と普通の口語と二通りローマ字で記してある。これが徳川末期の口語と長崎方言とを記録している点が100年前の口語又は方言資料として面白い。

筑紫文庫にあるものは，第3版で，大阪で出されたわずか59頁の小冊子であるが現在のところ筑紫文庫に1部見られるのみとされている。（文学部蔵）

解　説　荒木見悟
井田好治
井上忠
岡崎敬
鏡山猛
春日和男
新城常三
谷口鉄雄
中村正夫
中村幸彦
藤野保
三木俊秋
箭内健次

編　集　井田好治
岡崎敬
谷口鉄雄
中村正夫
西尾陽太郎
秀村選三

発行　昭和41年5月11日
九州大学文学部附属
九州文化史研究施設
印刷　九州大学経理部経理課印刷所

盤龍鏡